
四天王同好会へようこそ

在処

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四天王同好会へようこそ

【Nコード】

N8332U

【作者名】

在処

【あらすじ】

生まれ故郷を離れ、単身で東京の大学に入学した主人公”角井大和”は、謎のサークル『四天王同好会』に入会させられてしまった。四天王とは何か？なぜ同好会なのか？角井大和の摩訶不思議な大学生活が始まるっ！

入学（前書き）

誤字脱字等ありましたら随時報告お願いします。

入学

入学式の二日前に東京へと単身乗り込んだ俺は、入学式までの貴重な二日間を荷物整理に費やし、出歩くとしても近所のコンビニぐらいだった。

もったも、整理に二日もかかるほど荷物を持ってきたからではなく、東京という名のコンクリートジャングルが、寺と自然と鹿に囲まれ純真無垢に育まれた奈良県民を、快く迎えてくれると思えなかったからである。

しかし二日という期限もあっというまに無くなり、いよいよ入学式当日を迎え、俺は新調したスーツに身を包んで部屋を後にした。

小さな木造アパートの玄関を開けると、否が応でも東京の濁った空気が肌に触れ、呼吸を通して体内にズカズカと潜り込んでくる。なんとも言えない嫌悪感。

「東京に飲み込まれるな……俺！」

気合を注入するように喉を鳴らすと、それからはただひたすら足を動かした。

聳え立つ無数の高層ビルは、自分の方がより天に近い存在なのだと競い合うように築かれ、思わず見上げながら歩きたい！ という愚かしい衝動に駆られたが、

「心無い都民は、上ばかり気にして歩く青年を見ると、まだまだ上京するには青いな、この田舎者が！ と声をかけてくるのよ」と、母親から忠告を受けていたので、意地でも顔を上げなかった。

満員電車で揺られること二十分。ぎゅうぎゅう詰めにされながらも、これから四年間通う事になる『私立持国天大学』にやって来た。これぞアートと言わんばかりに、様々な蛍光色をちりばめられた異様なデザインの校門から、無駄に細長く、微妙に斜めっている講義棟が見え、「ようこそパラダイス！」と書かれた垂れ幕がたなびいていた。

桜でも植えておけばいいのに、こういうわけか構内には、杉と檜ばかり生えていて、風が吹くたびに花粉が飛び散っていた。花粉症患者お断りという事ですね。分かります。

高校三年の時の俺はどういうわけか、前衛的でかつ、日本人の三分の一が、マスク無しでは入る事すら叶わないという、この阿呆らしさに妙に惹きつけられた。

第一志望で受験し、見事合格してここに来たわけだが、新入生という今の立場から見れば、その判断浅はかだったと感じてしまう。毎日毎日あの乗車率四〇〇パーセントオーバーの中央線に乗って通うほど、このふざけた大学には価値があるのだろうか？ 不安はあっても期待はまるでなかった。

それでも俺は、馬鹿高い入学金と前期分の授業料を既に振り込んでしまったのだから、今さら奈良に帰る訳にはいかない。真面目に四年間通って、サークルやらバイトやらを経験し、充実した大学生活をする義務があるのだ。

蛍光色の校門をくぐると、自分の他にもスーツを着た新入生らしき学生もちらほら確認でき、同じようにドキドキ、というよりヒヤヒヤしながら歩く人間がいることに、少しだけ安堵した。

ネコミミをつけた、二頭身の女の子のイラストとともに、「入学式場はこっちだにゃん」と書かれてある悪ふざけとしか思えない案内板に従って進むと、今にも崩れ落ちそうな、木造作りの大きな建物が見えた。創立以来からある大学の体育館らしい。

中に入ると、外観とは裏腹に意外としっかりした作りをしていて、壁を包む紅白幕からちらりとのぞかせる木材も、木目がはっきりと分かるほど手入れが行き届いている。

床には緑のカーペットがびっしりと敷かれていて、何百というパイプイスがぎっしりと並べられていた。

どこでもいいから勝手に座ってくれ、という雰囲気が充満しており、俺は入り口に一番近い場所に腰を下ろした。

隣の席には既に男の新生が座っていたが、どこに座っても結局は面識のない学生と隣り合わせになるわけで、特には気にすることはなかった。

それは相手も同様に気にする素振りは見せず、むしろ親しげに「ねえ君。どこから来たの？ 学部は？ 名前は？」と、矢継ぎ早に質問してきた。

やんわりと「奈良から来た文学部の角井大和です」と簡単に返すと、男は「俺も俺も、俺も同じ」と歓喜の声をあげた。

出身地が同じなのか、学部が同じなのか。はたまた同姓同名なのか全く分からないですよ、と言うと「学部が同じ、文学部！」とピースを作って答えた。

少し人見知りの気がある俺にとっては、この馴れ馴れしいテンションは羨ましくもあり疎ましくもあった。だが東京に友人がいないという現状を考慮すると、ないがしろにするわけにもいかず、式の最中もいろいろ話しかけてくる隣席の男に、しぶしぶ付き合っていた。もちろん学長の挨拶を聞く余裕はなかったが、最初から聞くつもりもなかったので気にはしなかった。

入学式以来、俺はその男——名を木場雅人という——とよくつるむ様になっていた。

木場は新人生の割には、やけに大学の仕組みや大学周辺の地理や事情に通じており、ゴールデンウィーク明けにはバイトを始めたいと洩らすと、すぐにオススメのバイトを何件か教えてくれた。実に友達甲斐のある男でなによりも明るい性格から、四月も半ばに差し掛かると、俺は完全に心を開いていた。

「なあ角井、サークルは何やるつもり？」

「んー……まだ決めてないけど、どっかには入る予定」

学生食堂で昼食を二人でとっていると、サークルの話が持ち上がった。

持国天大学では四月の第四水曜日にサークルオリエンテーション、略してサオリと呼ばれる大規模なサークルの新生歓迎活動が行われる。サークルに所属する学生の九割は、このサオリにて所属サークルを決めている為、二回生以上のサークル員は、サオリに向けて慌しく準備をしているのだ。

「とりあえず、どっかから誘いがあったらそのサークル覗いてみて、興味が沸いたら入ろうかと思ってるけど」

「じゃあさ……どこからも誘われなかったらどうするんだ？」

「そんなわけないだろ。どこのサークルだって新入生を入れるために躍起になってるんだぞ。誘われないわけがない」

「でも角井……お前はまだ一回も誘われてないし、勧誘のビラももらってないだろ？」

木場にそう言われ、今までの短い大学生活を振り返ってみる。

入学式の時や大学の昼休みの時などにも、サオリほどの規模ではないものの勧誘活動は行われている。他の新入生達がビラをもらっている姿を何度も目撃していた。だが俺は、木場の言うとおりの勧誘を受けてもいないし、ビラも渡されていなかった。

「……確かに」

「だろ？ まあ俺もそうなんだけどな」

木場はそう大声で笑い飛ばした。学食で注文したカレーライスに木場の唾が入り、少しだけ腹が立つ。

「もしかしたら俺達は、新入生扱いされてないんじゃないか？」

ふと浮かんだ言葉をそのまま口に出してみた。その言葉に木場はどういうことだ？ と顔を近づけてきた。

「だからさ……きっと俺と木場は周りの学生に、新入生じゃなくて、二回生や三回生だと思われているんじゃないかな」

「なんで？」

「多分……木場が上級生っぽいから」

木場雅人という男は、先ほども言ったが新入生とは思えないほど大学に慣れている。一緒にいると大変便利なのだが、そんな木場に違和感を覚えていたのも事実だった。

「おいおいそりゃねーよ。いくら俺がチョイ悪ファッションに身を包み、ダンディズムを振り撒いているからといって、上級生に間違えられるなんてことは無いだろ」

「どこがチョイ悪だ。何がダンディズムだ」

普段の木場は、ロングTシャツとデニムパンツというラフなファッションで構内を歩き回っている。色使いも暖色がメインでチョイ悪とは対極にあり、当然ダンディズムを醸し出しているはずもない。朝起きた時に目に入った服をそのまま着ているんだな、という印象しかなく、ファッションにこだわっているふうには見えなかった。

「んま、とりあえずサオリでも勧誘されない可能性もあるかもしれないしさ、やっぱりこっちから歩み寄るっていうのもありじゃないか？」

木場は俺の突っ込みを無視して、本題はここからだと言わんばかりの態度で、声のボリュームをあげる。カレーライスにまた唾が入る。

「なんだよ木場？　もしかしてお前入りたいサークルがあるのか？」
「ご名答！　実は目をつけていたサークルがあるんだよ」

そういうと木場は自分の鞆をガサゴソと漁り、一冊の薄いパンフレットを取り出した。それはサオリ用に作られた大学で活動する全サークルの紹介文が載せられたパンフレットだった。それをテーブルの上におき、耳を折った部分のページまで開いて見せてきた。

「……お前、マジでこんなのに入りたいのか？」
そのページで紹介されているサークルを見た時、素直な気持ちでそう答えた。

「おうよ。だってなんか面白そうだろこのサークル」
面白そう？ どうしてこのサークル名を見てそういう心境に至れるんだ。

俺はもう一度そのページ、いやそのサークル名称に目を向けた。

『持国天大学四天王同好会』

四天王って何だよ。

見学

正直サオリになればサークルの勧誘は来るだろうと思っていたのだが、全サークルの勧誘活動が終わった今現在、俺と木場はこのサークルにも誘われなかった。

他の新入生はいろいろなサークルからの熱烈アピールを受けているというのに、俺達はアウトオブ眼中といった具合に誰も寄って来ない。

サオリ用パンフレットを手元に持ち、少し挙動不審に振舞って、俺は新入生だよ！ というアピールを試してみたにもかかわらずだ。

「角井、誘われなかったな」

「ああ……誘われなかった。どうしてだ？」

さあ？ と肩をすくめた木場は、溜息をついて俺の肩を叩いた。

「じゃあ行こうか。四天王同好会の所に」

笑顔で語りかける木場を見ると、俺の気持ちはますますと暗い方へと落ちていった。一体どうして俺がそんなサークル名から活動内容の一かけらも伺えないような、意味不明なサークルを行かなければならないんだ。

四天王同好会ってなんだよ？

その同好会に入ったら四天王になれるのか？

というか何の四天王だよ？

「まずは見学しにいきましょう。見てからでも判断できるだろう？」

「……分かったよ。とりあえず見に行くだけな。入るわけじゃないぞ」

「はいはい。さてどんなサークルだろうねえ」

俺は四天王同好会の部室へ向かう木場の後をつけるように歩き始めた。四天王同好会の部室は、講義棟の地下二階の突き当りの部屋にあるらしく、奥に進めば進むほど辺りは暗くなり、空気もそれに合わせて冷たくしっとりし始める。

まるで悪の巣窟に向かう勇者のような感覚になったが、別に勇者となって四天王を倒しに行くわけではないと、そのおかしな感覚を振り払った。

そんな俺とは対照的に、木場は明らかに入る気満々といった高いテンションを維持している。一体何が木場のテンションを上げているのかを聞いてみた。

「だって四天王だぞ！ ゲームやらマンガやらでしか見たことないのに、それが現実にいるんだぞ。同好会に入らないにしても、四天王を見るだけでも価値があると思わないか？」

確かに俺にだってそういった類の興味はある。四天王同好会というぐらいなのだから、実際に四天王がいるのだろう。見てみたいとも思う。だが問題は何の四天王なのかという話だ。ただ四天王って言われても胡散臭いカルテットにしか思えない。

「角井の場合はさ、四天王とかどうとかは忘れて、ただサークルを見にいくテンションでいればいいんだよ。あくまでサークル見学」

そうだなと軽く返事をして、どんどんと暗くなっていく講義棟を奥へ奥へと進んでいった。

二分も歩くと地下二階の突き当たりにつかり、『四天王同好会』という木でできた看板が掲げられた部室が目に入る。ドアについているスモークガラスから電灯の光が漏れていた。どうやら四天王は室内にいるようだ。

「そんじゃ……入ろうか」

「待て、一旦深呼吸してからいこう」

木場は大袈裟だなと笑ったのだが、俺はそれなりの覚悟をしていないと、部室の中に入る勇気が持てなかった。

もしかしたらカルト宗教団体かもしれない。

もしかしたらマルチ商法団体かもしれない。

部室を目の前に、嫌な予感しか浮かばず、俺は何回も深呼吸をした。木場がもういいかと聞いてきたので、俺は無言で頷いた。

「――失礼します」

ノックをした木場が部室のドアをゆっくりと開けた。部屋の中に入ってみると、四天王同好会の部室は一般的な会議室のようで、白というよりはベージュに近い壁紙に覆われた部屋だった。

部屋の奥にはホワイトボードがあり、その前に長机とパイプイスが並んで三脚置かれていた。特に目立った装飾品はなく、四天王同好会っぽさはどこにもなかった。

そもそも四天王っぽさが一体どういうものなのか分からないので、

俺には何も言えないのだが。

ここで唯一気になった点をあげれば、部屋の中央に不自然なほど堂々とパイプイスが設置されていた事だ。まるで誰かを面接のするような配置だが、幸か不幸か面接官はもちろん、その受験者らしき人物も部屋にはいなかった。

「なんだよ……誰もいないじゃないか」

覚悟を決めてきたのに誰もいないとはあまりに拍子抜けだったが、ここで四天王同好会なんて馬鹿げたサークルに関わらずに済んでほつとしたという気持ちもある。

だがここで緊張の糸を緩めてはいけない。このタイミングで四天王が部室に戻って来てみる……完全に逃げ場がなくなる。まさに袋の鼠だ。早くこの場から離れねば、下手すれば無理矢理四天王に担ぎ上げられる可能性もある。

俺は意外と押しに弱い。もし泣きながら「あなたが入ってくれないと同好会がなくなってしまうんです!」という風に懇願されてしまったら、同情からか思わず首を縦に振ってしまうかもしれない。

四天王なんか絶対になりたくはない。

もちろんそれは恥ずかしいとか、馬鹿げているとかの感情から嫌だという部分もあるが、それと同等に俺が四天王同好会に入ることメリットがない事があげられる。というかデメリットしかない。

たとえば、数年後に控えた就職活動の時を考えてみよう。企業面接の際に「あなたは大学で、どのようなサークル活動をしていましたか?」なんて質問をされたら、俺はどう答えればいいのか分からない。

「大学四年間、四天王をやっていました」

……なんて言える訳がない。俺が選ぶ立場だったら間違いなく不採用の判を押すし、おまけにその自称四天王さんには精神科への通院をお勧めするだろう。

改めて思う——誰もいなくて良かった。危うく俺は四年間の大学生活どころか、これからの六十年に渡る、長い人生を棒に振るところだった。

「木場。誰もいないから今日のところは帰ろうぜ」

今日のところはと言ったが、もう二度とここに来るつもりはない。

「いや……角井。ここに入ってしまった以上、お前は帰れない。いや、帰さない」

木場はそう言うのと、ガチャリとドアに鍵がかかる音がした。四天王同好会の部室のドアを——唯一つの出口を木場は塞いだのだ。

「……木場、そういう性質の悪い冗談は好きじゃない。早く開けろ」
無理矢理に木場の手をドアノブから放そうとしたが、どういうわけか本気で抵抗してきた。

「だから帰さないって言ってるだろ！ お前は四天王になるんだ！」
「ふざけんなバカ！ お前が四天王同好会に入るのは別に構わないが、俺まで巻き込むな！」

さらに力を込めて木場の腕を引き離そうとするが、全くビクとも

しない。力に自信があるほうではないが、同じような背格好の人間に、ここまで力の差があるとは思えなかった。少しだけ男としての自尊心を傷つけられた俺は、きっと木場の顔をキッと睨みつけた。

——その時見たものを俺は忘れない。木場の口から、ガラリと銀色の光った刃物のような牙が見えたのだ。

その牙は短くても一寸ほどの長さがあり、八重歯の部分にニョキッと生えていた。明らかに人間の歯ではなく、まるで血に飢えた吸血鬼のような牙。

「お前……その牙——」

引きずった声で俺がそう口にする、木場の背後から、「バァアウ！」とまるで野生の獣が威嚇するような雄叫びが聞こえた。その声に身が竦みあがり、木場の腕を引き離そうと力んでいた腕の力が抜け、そのまま腰から床に落ちてしまった。

見上げるとそこには尖った牙などない、普段自分が目にしている木場の顔がそこにあった。

「……悪いな角井。ちゃんと説明するからそこに座ってくれないか？」

木場は部屋の中央にポツンと佇むパイプイスを指差した。

……まさか俺用だったとは。

入会？（前書き）

パイプイスに座った俺は、まるで見世物ようだった。進む事も引く事もできず、ただ部屋の奥で長机に肘を付いて座っている木場に見られている。

何度か木場に、これは一体どういう事なのかと尋ねてみるものの、木場はただ「もう少しで来るからそのまま待っていてくれ」と投げやりに答えるだけだった。

もう少しで来るというのは十中八九——四天王だろう。

四天王がこの何もない部屋にやってきて、何らかの方法で俺に迫ってくるはずだ。

体から脂汗がジワリと滲み出る。なぜ俺がこんなに緊張しなければいけないんだ。

「角井……そんなに緊張しなくても平気だよ。別にとって食おうって訳じゃないんだから」

はははと笑う木場は、おそらく俺をリラックスさせようとそう言ったのだろうが、その前置きのせいで逆に身構えてしまう。ここに来て小心者の真骨頂を発揮してしまうのが、なんとも口惜しい。

そもそも今俺がこんな目にあっているのは、目の前にいる馴れ馴れしい男のせいだ。木場が四天王同好会なんてふざけたサークルに誘おうとしたから——いや、入学式にこの男の隣に座らなければ、何の問題もなく普通の大学生活を送れるはずだった。

というか木場は何者なんだ？　もしかして木場は既に四天王同好会に所属し、初めから親交のあった俺を勧誘しようと企んでいたのか？

つまり木場は、四天王という事になる。それで木場が四天王だとするとその場合――やめよう。いくら考えても答えなんて出るわけがない。たとえ答えが出たとしても、今の俺には四天王が来るまで待つしか選択肢はないのだから。

ものの数分も経たぬ間に、背後からトントンとドアをノックする音が聞こえた。木場が「どーぞ」と偉そうに机に肘を付きながら答える姿に、多少イラっとしつつも、とうとう四天王がやって来たのだと心拍数が急激に上がるのを感じた。

「失礼します」と爽やかな男性の声が耳に入ると、後ろに振りかかって顔を拝んでやろうと思ったが、もしここで振り返って、「何勝手に動いてんじゃワレエ！」とか言われたら、もう完全に心が折れてしまう。あくまでも妄想だが、それほどまでに切羽詰まった心理状況だった。

そんな妄想をしているうちに、たった今やって来た四天王達は、木場を挟むように残りのパイプイスに座った。木場の右隣に座ったのは、「失礼します」と爽やかボイスで入室してきた男性だろう。何かいい事でもあったのか、と言わんばかりのとびっきりのスマイルを常に維持し続けていて、いい人オーラが半端ではない。しかも悔しいほどの美形。

とりあえず、危害を加えそうにもない人物ではあったので、ほっ

として肩を撫で下ろしたのだが——問題は木場の左隣に座った四天王だ。

コイツに至ってはもう四天王どころでは無く、全てがおかしい。男性なのか女性なのか判別できないし、そもそも人間かどうかも分からない。

どうして首から上が『鳥』なんだ？

黒目がちなクリツとした瞳に、太く頑丈そうな嘴。そして茶色で覆われた羽毛がなんともチャーミング。その鳥類特有の愛らしさが全身にまで及んでいればいいのだが、いかんせん首から下はカーキ色のツナギを着ている。人間の身体をしているから困る。

一言で表現するのならば『鳥人間』という他ない。今、俺の視界の中に、文字通りの鳥人間が存在しているのだった。

「大丈夫だよ。角井」

木場は俺の視線に気付いてか、真っ先に左隣にいる鳥人間の紹介を始めた。

「彼女は二回生の黒羽千鳥。四天王同好会の紅一点。今は鳥のマスクを被っているけど、中身はごく普通の女子大生だよ」

木場の紹介で目の前にいる鳥人間は鳥のマスクを被った人間だと言う事はわかったが、それがごく普通の女子大生という風には、脳内のシナプスが繋げようとはしなかった。

どう考えても、頭の中にお花畑が広がっている危ない人間だ。今すぐ精神科に通院しなさいと言ってやりたい。

「木場よ……このマスクは十姉妹だ。鳥という大きな括りでまとめるな。この世界に一体どれほどの鳥類がいると思っっているのだ？」

ここで鳥人間が初めて声を出した。確かに女性特有の少し高めの声ではあるのだが、声に少し怒気が混じっていて、それがニュートラルな状態ではない事は判断できた。

そんな鳥人間に「悪いな千鳥」と木場が馴れ馴れしく謝ると、無言で頷いて俺の顔を十姉妹のマスク越しに見てきた。

「どこからどう見ても十姉妹だろう？」

「いや……専門外なのでよく分からないです」

一応二回生との紹介を受けたので敬語で答えてはみたが、鳥人間に対して何故真面目に答えているのだろう、と頭が混乱し始めていた。その様子を鳥人間は黙ってつぶらな瞳で見る。

——なんなんだこの状況は。

「で、次はこっちの彼だな」
話の流れを変えるように、木場は右隣に座っていた爽やかボーイの紹介を始めた。

「三回生の市川蛇蔵。四天王同好会一の色男だよ」

「その容姿に似合わぬ胡散臭さとプレイボーイ臭を漂わせる名前はなんなんだ」

その圧倒的なネーミングの前に、思わずノータイムで突っ込んでしまった。俺の速攻に木場は思いがけず驚いたようだが、それに対し蛇蔵本人は言われ慣れてしている様子で、平然としていた。

「やっぱりそうだよね。俺もこんなふざけた名前はないって何度も親に詰め寄った事があるよ。でも本名なんだよね。なんなら免許証みせようか？」

蛇蔵は自身の財布から免許証を取り出して俺に見せてきた。これでもかというぐらいの笑顔を作った蛇蔵の顔写真とともに、『市川蛇蔵』という胡散臭い名前が記載されていた。

「ね、本当でしょ」と蛇蔵が俺に微笑みかけたが、俺は全く笑えなかった。ただ蛇蔵の両親と、その名前を受理した役所の人間の神経を疑うばかりだった。

「じゃあ最後は俺の紹介をしようかな」

木場はすつと立ち上がり、俺の顔をニヤニヤしながら見つめてきた。

「紹介なんかしなくても知ってるよ。それより、この状況を説明しろよ」

「まあ落ち着けて、ここが一番面白いところなんだから、黙って聞いとけ」

妙に自信たっぷりで答える木場を、俺は苛立ちを隠す事無く睨んだ。鳥——でなく十姉妹のマスクを被った女子大生よりも、蛇蔵という名の爽やかボーイよりも、木場が面白いわけがない。

「わかったよ。さっさと自己紹介しろ」

俺が投げやりに答えると、木場は親指をビツと前に突きだしてきた。こういう仕草が余計に腹立つ。木場はゴホンと咳払いをして呼吸を整えてから口を開いた。

「俺の名前は木場雅人。持国天大学の——四回生だ」

「……は？」

俺の間の抜けた声が部室内に響いた。いや声だけでなく顔も間の抜けた表情になっていたに違いない。

木場が——四回生？

「ちょっと待て木場。今のは俺の聞き間違いか？ 今木場は自分の事を四回生だと言ったように聞こえたんだが」

「聞き間違いじゃない。俺は今、自分の事を四回生だと言った」

ぶわっと汗が流れてきた。額やら背中やら脇やら、それは遠慮することなく滝のように流れ出る。

じゃあ何か？ 俺は今の今まで、四回生の大先輩に対して、同学年のように振舞っていたという事なのか？

「そんな馬鹿な……そんな事あるわけない。そんな事、あり得ない！」

「それがあり得るんだよ。ほれ……俺の学生証。入学年度が角井よりも三年早いだろ？」

提示された木場の学生証には、傷だらけで少し黄ばんでいた。木場の言う通り入学年度を確認してみると、確かに三年前の入学と記載されていた。

「な、本当だろ」と木場が俺に微笑みかけたが、俺は全く笑えなかった。ただ俺を騙す為だけに、ここまでやる木場の神経を疑うばかりだった。

入会？

パイプイスに座った俺は、まるで見世物ようだった。進む事も引く事もできず、ただ部屋の奥で長机に肘を付いて座っている木場に見られている。

何度か木場に、これは一体どういう事なのかと尋ねてみるものの、木場はただ「もう少しで来るからそのまま待っていてくれ」と投げやりに答えるだけだった。

もう少しで来るというのは十中八九——四天王だろう。

四天王がこの何もない部屋にやってきて、何らかの方法で俺に迫ってくるはずだ。

体から脂汗がジワリと滲み出る。なぜ俺がこんなに緊張しなければいけないんだ。

「角井……そんなに緊張しなくても平気だよ。別にとって食おうって訳じゃないんだから」

はははと笑う木場は、おそらく俺をリラックスさせようとそう言ったのだろうが、その前置きのせいで逆に身構えてしまう。ここに来て小心者の真骨頂を発揮してしまうのが、なんとも口惜しい。

そもそも今俺がこんな目にあっているのは、目の前にいる馴れ馴れしい男のせいだ。木場が四天王同好会なんてふざけたサークルに誘おうとしたから——いや、入学式にこの男の隣に座らなければ、何の問題もなく普通の大学生活を送れるはずだった。

というか木場は何者なんだ？　もしかして木場は既に四天王同好会に所属し、初めから親交のあった俺を勧誘しようと企んでいたのか？

つまり木場は、四天王という事になる。それで木場が四天王だとするとその場合――やめよう。いくら考えても答えなんて出るわけがない。たとえ答えが出たとしても、今の俺には四天王が来るまで待つしか選択肢はないのだから。

ものの数分も経たぬ間に、背後からトントンとドアをノックする音が聞こえた。木場が「どーぞ」と偉そうに机に肘を付きながら答える姿に、多少イラっとしつつも、とうとう四天王がやって来たのだと心拍数が急激に上がるのを感じた。

「失礼します」と爽やかな男性の声が耳に入ると、後ろに振りかかって顔を拝んでやろうと思ったが、もしここで振り返って、「何勝手に動いてんじゃワレエ！」とか言われたら、もう完全に心が折れてしまう。あくまでも妄想だが、それほどまでに切羽詰まった心理状況だった。

そんな妄想をしているうちに、たった今やって来た四天王達は、木場を挟むように残りのパイプイスに座った。木場の右隣に座ったのは、「失礼します」と爽やかボイスで入室してきた男性だろう。何かいい事でもあったのか、と言わんばかりのとびっきりのスマイルを常に維持し続けていて、いい人オーラが半端ではない。しかも悔しいほどの美形。

とりあえず、危害を加えそうにもない人物ではあったので、ほっ

として肩を撫で下ろしたのだが――問題は木場の左隣に座った四天王だ。

コイツに至ってはもう四天王どころでは無く、全てがおかしい。男性なのか女性なのか判別できないし、そもそも人間かどうかも分からない。

どうして首から上が『鳥』なんだ？

黒目がちなクリツとした瞳に、太く頑丈そうな嘴。そして茶色で覆われた羽毛がなんともチャーミング。その鳥類特有の愛らしさが全身にまで及んでいればいいのだが、いかんせん首から下はカーキ色のツナギを着ている。人間の身体をしているから困る。

一言で表現するのならば『鳥人間』という他ない。今、俺の視界の中に、文字通りの鳥人間が存在しているのだった。

「大丈夫だよ。角井」

木場は俺の視線に気付いてか、真っ先に左隣にいる鳥人間の紹介を始めた。

「彼女は二回生の黒羽千鳥。四天王同好会の紅一点。今は鳥のマスクを被っているけど、中身はごく普通の女子大生だよ」

木場の紹介で目の前にいる鳥人間は鳥のマスクを被った人間だと言う事はわかったが、それがごく普通の女子大生という風には、脳内のシナプスが繋げようとはしなかった。

どう考えても、頭の中にお花畑が広がっている危ない人間だ。今すぐ精神科に通院しなさいと言ってやりたい。

「木場よ……このマスクは十姉妹だ。鳥という大きな括りでまとめるな。この世界に一体どれほどの鳥類がいると思っっているのだ？」

ここで鳥人間が初めて声を出した。確かに女性特有の少し高めの声ではあるのだが、声に少し怒気が混じっていて、それがニュートラルな状態ではない事は判断できた。

そんな鳥人間に「悪いな千鳥」と木場が馴れ馴れしく謝ると、無言で頷いて俺の顔を十姉妹のマスク越しに見てきた。

「どこからどう見ても十姉妹だろう？」

「いや……専門外なのでよく分からないです」

一応二回生との紹介を受けたので敬語で答えてはみたが、鳥人間に対して何故真面目に答えているのだろう、と頭が混乱し始めていた。その様子を鳥人間は黙ってつぶらな瞳で見る。

——なんなんだこの状況は。

「で、次はこっちの彼だな」
話の流れを変えるように、木場は右隣に座っていた爽やかボーイの紹介を始めた。

「三回生の市川蛇蔵。四天王同好会一の色男だよ」

「その容姿に似合わぬ胡散臭さとプレイボーイ臭を漂わせる名前はなんなんだ」

その圧倒的なネーミングの前に、思わずノータイムで突っ込んでしまった。俺の速攻に木場は思いがけず驚いたようだが、それに対し蛇蔵本人は言われ慣れてしている様子で、平然としていた。

「やっぱりそうだよね。俺もこんなふざけた名前はないって何度も親に詰め寄った事があるよ。でも本名なんだよね。なんなら免許証みせようか？」

蛇蔵は自身の財布から免許証を取り出して俺に見せてきた。これでもかというぐらいの笑顔を作った蛇蔵の顔写真とともに、『市川蛇蔵』という胡散臭い名前が記載されていた。

「ね、本当でしょ」と蛇蔵が俺に微笑みかけたが、俺は全く笑えなかった。ただ蛇蔵の両親と、その名前を受理した役所の人間の神経を疑うばかりだった。

「じゃあ最後は俺の紹介をしようかな」

木場はすつと立ち上がり、俺の顔をニヤニヤしながら見つめてきた。

「紹介なんかしなくても知ってるよ。それより、この状況を説明しろよ」

「まあ落ち着けて、ここが一番面白いところなんだから、黙って聞いとけ」

妙に自信たっぷりで答える木場を、俺は苛立ちを隠す事無く睨んだ。鳥——でなく十姉妹のマスクを被った女子大生よりも、蛇蔵という名の爽やかボーイよりも、木場が面白いわけがない。

「わかったよ。さっさと自己紹介しろ」

俺が投げやりに答えると、木場は親指をビツと前に突きだしてきた。こういう仕草が余計に腹立つ。木場はゴホンと咳払いをして呼吸を整えてから口を開いた。

「俺の名前は木場雅人。持国天大学の——四回生だ」

「……は？」

俺の間の抜けた声が部室内に響いた。いや声だけでなく顔も間の抜けた表情になっていたに違いない。

木場が——四回生？

「ちょっと待て木場。今のは俺の聞き間違いか？ 今木場は自分の事を四回生だと言ったように聞こえたんだが」

「聞き間違いじゃない。俺は今、自分の事を四回生だと言った」

ぶわっと汗が流れてきた。額やら背中やら脇やら、それは遠慮することなく滝のように流れ出る。

じゃあ何か？ 俺は今の今まで、四回生の大先輩に対して、同学年のように振舞っていたという事なのか？

「そんな馬鹿な……そんな事あるわけない。そんな事、あり得ない！」

「それがあり得るんだよ。ほれ……俺の学生証。入学年度が角井よりも三年早いだろ？」

提示された木場の学生証には、傷だらけで少し黄ばんでいた。木場の言う通り入学年度を確認してみると、確かに三年前の入学と記載されていた。

「な、本当だろ」と木場が俺に微笑みかけたが、俺は全く笑えなかった。ただ俺を騙す為だけに、ここまでやる木場の神経を疑うばかりだった。

入会？

「じゃあここでネタバラシといきますか」

木場はイスに座り、真面目な顔を作った。俺はあからさまに帰りたいオーラを出していたが、

「……とりあえず聞くだけ聞いてくれないか？ 答えはそれからでも遅くないだろ？」

と木場が落ち着いて聞いてくれという態度を示してきたので、そのまま俺はなだめられてしまった。四天王になる、ひいては四天王同好会に関わるのは絶対に嫌なのだが、ある程度の説明はして欲しいと思っていたので、イスに座ったまま「はい」と頷いた。一応木場が四回生だと判明したので、言葉遣いと姿勢には気をつけてみた。

「まずは四天王同好会がどのような活動をするのかが、知りたいはずだよな？」

俺が頷いたのを確認した木場は、いつもより低い声で声を発した。

「我々四天王同好会の活動内容は……ずばり『戦争』だ」

……戦争？

何度も耳にした事のある響きだが、実際には触れたことのないフ

レーズ。平和ボケした日本人に俺にとってはまるで現実感のない言葉だった。それを四天王同好会は活動内容にしているとのこと。

四天王になって、戦争をする？　なんだそれ？

木場は「黙って聞いておけ」と首をかしげる俺に語りかけ、続けた。

「四天王同好会はずちの大学でなく、持国天大学の提携校である――増長天大学、広目天大学、毘沙門天大学の四校にも存在する」

木場はポケットからマジックを取り出し、ホワイトボードに書き始めた。

「東の持国天。南の増長天。西の広目天。北の毘沙門天。各校から四名の代表者、つまり四天王を選出し、その四天王同士が己の大学の威信と名誉をかけて戦争をする――これが四天王同好会の主な活動だ」

声に合わせて各大学名を東西南北に書き分けた木場は、思い切りホワイトボードを叩いた。

「燃えないか？」

「燃えないです」

四天王になって、他の四天王と戦争をするというのは理解できたが、一体どのような『戦争』を行うのかは定かでない。サバイバルゲームが脳内にパツと浮かぶが、それならばただのサバイバルゲーム同好会だ。わざわざ木場が一回生のフリをするなど、回りくどく俺を勧誘してきたのだから、その可能性は低いだろう。

「わけわかんねえって顔してるな。まあ戦争って言っても、傍から見れば遊びみたいなもんだ」

戦争が、遊び？　ますます迷宮入り。

これ以上考えても答えは出ないだろうと判断し、静かに聞く事に専念した。

「この戦争は四天王だけで戦うのではなく、四天王が使役する『精霊』と共に戦うんだ」

「精霊……ですか？」

「そう精霊だ！　万物に宿る八百万の神々——それが精霊だ！」

話がとうとう不可解なベクトルへと進んでいった。四天王の時点で十分に非常識な話なのに、それに加えて精霊なる曖昧模瑚な存在が登場しだした。

なにそれえ？

「……どうやら角井は精霊の存在を信じていないようだな」

表情には出ていないと思ったのだが、俺の身体は正直に作られているらしい。それならば隠す必要はない。

「そりゃそうですよ。精霊とか幽霊とかそういう類のものを、俺は見ただことないですから」

「まあそうだよな。俺も最初は信じてなかったし」

なんか懐かしいな、と木場は蛇蔵に話しかけると「そうですね」とこれまた素敵スマイルで応えた。

「この場で精霊のなんたるかを説明するのは難しいから、とりあえず四天王同好会は精霊を役使して、大学の代表として戦うサークルって理解してくれば充分だよ」

蛇蔵が優しそうに微笑を向けた。男の俺から見てもドキッとするような端正な顔立ちで、まじまじと顔を見てしまう。こんなに温厚で清潔感のある男性も四天王で、そのうえ精霊なんて別次元の生命体と共に戦争をしているようだ。まったくもって想像できない世界観。

「……あの、一つだけ質問いいですか？」

なんだ？ と木場が俺の質問に前かがみになって顔を近づけてきた。無駄に近い。

「今までの話から察するに、木場さんと蛇蔵さんと鳥人——じゃなく千鳥さんは四天王なんですよね？」

「そうだ。三人とも四天王だ」

「もう一人はどこにいるんですか？ 四天王って言うんですから四人いないとおかしいですよ？」

「何を言ってるんだ角井。もうこの部屋にいるじゃないか？」

木場はずいっと人差し指を前に突き出した。その指先は俺に向かっている。

「角井大和——お前が四天王になるんだよ」

俺は何も言えなくなった。助けを求めようと蛇蔵の方を見たが、ただニコニコしているだけで一向に喋ろうとはしない。一応鳥人間の方も見てみるが、当然の事ながら助ける素振りは見せず、つぶらかな瞳で俺を見つめるだけだった。

「四天王って言うのは、各学年で一名選出されるんだよ。去年の、四回生の四天王——つまり俺の一つ上の先輩は無事に四天王としての役目を終え、卒業していったんだ」

「それで四天王の座が一つ空いて、俺が代わりに四天王に選ばれたって事ですか？」

そういう事、と木場は満足そうに頷いた。

いやいやいやいや、これはおかしい。いつの間に俺は四天王に選ばれていたんだ？

四天王に立候補した覚えはないし、王なんて呼ばれる程の器ではない。今までの人生を振り返ってみても、四天王に関わる要素を俺は何一つ持っていない。小中高と人並みに生活し、普通に受験してこの持国天大学に入学しただけであって、特に秀でた才能は持ち合わせていない。

「何かの間違いじゃないですか？」と木場に聞いてみたが、

「いんや、お前は間違いなく新しい四天王になる人物だ」と自信満々に返されてしまった。だがそう言われても、どうして俺が四天王に選ばれたのかをきっちり説明してもらわなければ納得できない。

「四天王に選ばれた理由？ それは角井が入学式の時に俺の隣に座ったからだよ」

なんだその理由は。ポカンと口をあけた俺に、木場はさらに説明を続けた。

「持国天大学四天王同好会では、新しい四天王を選ぶのに代々決められた方法があるんだ」

木場は再びホワイトボードに向かってマジックを走らせた。

「入学式の日、四回生の四天王が新入生を装って参加する。その時自分の座った席の隣に『この中で一番霊力の高い新入生』が座るように秘術をかけておくんだ。精霊を使役するにはある程度の霊力が必要だからな」

霊力だ秘術だ、また自分の理解の範疇を超えるぶっ飛んだ単語が飛び出してきた。今まで培ってきた人生観やら倫理観を一気にぶち壊そうとでもしているのか？

「ちょっと待って下さいよ。俺があの時木場さんの隣に座ったのは、たまたま入り口に近かったからで、特に秘術やらにかけられた覚えはないんですが」

「自覚がないだけだ。むしろ無自覚でなんとなく座るという事は、それがそのまま角井の霊力の高さを示している。一般人なら近づくだけでも嫌になるように仕向けたし、現にお前のように入り口に近いかから座ると考える学生はたくさんいたのに、誰もそこには座ろうとはしなかった。それが何よりの証拠だ」

そう言われると確かにそんな気もしてくるから不思議だった。だ

が霊力とかそんな不明瞭なものさしで測られても、正直な話困ってしまう。

「これが新しい王を選ぶ為、百年の永きに渡って受け継がれてきた儀式——選択の儀式！」

木場はホワイトボードに『選択の儀式』と書き残すと、思い切りホワイトボードを叩いた。

「カッコよくないか？」

「カッコよくないです」

叩きつけた右手をすつと降ろした木場は、俺とのノリの違いに少し恥ずかしそうに頬を赤らめた。ゴホンと咳払いをして木場は普段の表情に戻る。

「まあ後は簡単だ。新人生のフリを角井と友情を育めばいいだけだからな。おかしいと思わなかったか？ どうして俺と角井には、サークル勧誘が来なかったのか」

「——まさか」

「そう、そのまさかだ。四天王である俺が角井に付きまっている以上、他のサークルが勧誘してくるはずがないんだ。この大学に通

っている学生は、全員四天王の存在を認知している。それに目をつけられたお前を誘うなんて無駄足を踏むわけがない」

他のサークルから一切勧誘が無かったのにはそういうカラクリがあったのか。やはりこんな事態に陥ったのは、木場雅人という男のせいだったのだ。

こんな強引なやり方で俺を勧誘するなんて実に腹立たしい。絶対に入ってやるものか。もっと大学生らしいサークルに入って、青春を謳歌してやる。そう心の中で誓ったのだが、俺がそのような心境に至る事すら予想していたのか、迷わず木場がとどめの一撃を入れてくる。

「一応言っておくが、ここで四天王同好会に入らない——つまり四天王にならないければ、これから先の四年間、どこのサークルにも入れないぞ」

「な、なんでそうなるんですか！」慌てて聞き返す。

「さっきも言ったけど、四天王は大学の代表として他の大学と戦う。もし一人でも欠けて不戦敗にでもなったらそれこそ大問題だ。そんな貴重な四天王を自分のサークルに入れようものなら、そのサークルは大学の名誉を著しく傷つけたとして大学側から猛抗議を受け——最悪、サークルは無くなる。そんなリスクを背負ってまで、お前を受け入れるサークルなんてこの大学にはない」

肩の力がふっと抜けるのを感じた。あまりに理不尽な展開に、全

身の力が入らない。

「サークルに入れないとなると、きっと大学では友達一人もできないだろうね」

横から蛇蔵が追加攻撃。木場と蛇蔵のツープラトンアタックに瀕死である。

奈良から単身東京に乗り込んできた俺にとって、現在友達と呼べるのは（一応）木場ただ一人。それを失い、さらに他でも友達が作れないと言う事は、無垢で世間を知らない田舎者が、眠らない街、東京に裸一貫で放り出されるのと同義。耐えられない。

「安心しろよ角井。四天王同好会は他のどのサークルよりも楽しいし、やりがいもある。その上大学の代表として様々な特権が与えられる上、飲み会や旅行といったイベントもちゃんとある」

そんなタイミングで木場は優しく声をかけた。その声に断るという選択肢を？き消されてしまった。

「……入ります」

え？ と聞き返してきた木場は明らかにしたり顔だった。逃れようのない所まで四天王の策略に堕ちていたのだ。

「四天王同好会に入ります！ 立派な四天王になれるよう、ご指導

「ご鞭撻をよろしく願います！」

俺ははっきりと四天王になると宣言した。その反応を見た木場はニヤツと笑みを浮かべた。

「勿論だ。四天王として持国天大学の名誉と誇りをかけて——共に戦おう！」

こうして俺は、四天王としての第一歩を踏み出した。

ハイキング？

「皆でハイキングに行くぞ」と木場から電話連絡があったのは、それから一週間後のゴールデンウィーク直前のことだった。

木場曰く、「須弥山」と呼ばれる標高三百メートルほどの小高い山に登り、その頂で宴を催し、新たに選ばれた四天王を精霊たちに紹介するというのが、代々の習わしらしい。

ようは新人生歓迎コンパをハイキングという形で行うとの事だった。本当は連休を利用して奈良に帰ろうと思っていたのだが、一応四天王に選ばれた身なので「わかりました」と電話越しに答えた。それを確認した木場は、「じゃあ明日八時に駅で待ち合わせな」と一方的に電話を切ってしまった。

明日って急すぎるだろ常識的に考えて。

木場は俺が四天王同好会に入会後、急に偉そうな態度をとるようになった。木場が四回生で、俺が一回生なのだからそれはそれで当然な事なのかも知れないが、以前の感覚でふと「木場」と呼び捨てにしようものなら、「先輩を呼び捨てってどういう事だ」と執拗なまでに突っかかってくる。本当に騙されたと言わざるを得ない。

翌朝、言われた通りに駅に向かうと既に三人は到着しており、「一回生は普通一番に来るもんだろうが」と木場から嫌味を聞かされた。心の中では「言われたとおりに来たんだからいいだろうが」と思いつつも、軽く頭を下げてみせると、

「俺はいいんだよ。増長天の皆さんを待たせた事がいけないんだ」と近くにいた見知らぬ四名の男女の方に手を向けた。頭を上げるとその内の一人の男性が、

「初めまして。増長天大学四天王同好会の沼田と言います。あなたが持国天の新しい四天王ですね」と物腰柔らかかに挨拶してきた。

それに倣って俺も簡単に自己紹介と挨拶を済まし、増長天大学の四天王を一通り見渡してみた。どれもこれも一般的な大学生といった雰囲気で、持国天大学の鳥人間のような別次元の生物はいない。

強いて変わった人物をあげるならば、これからエベレストでも踏破するのですか、と突っ込みたくなるほどの大量の登山用具に身を包んだ女性だろう。その女性は見た感じ二十キロはありそうな程パンパンに膨らんだザックを背負い、身体を九の字に曲げながら既に息を切らしていた。

「彼女は牛嶋素子さん。角井君と同じく入学したばかりの増長天大学の四天王だよ」

蛇蔵は俺にそう説明すると、今にも倒れそうな新四天王のもとに駆け寄り「大丈夫？」と声をかけた。この行動の早さは、さすがはプレイボーイ（名前からくる勝手な想像だが）である。

「私は大丈夫です！先輩方にお手数をおかけできません！」
同学年の彼女――牛嶋さんは、やけに声を張ってで強がって、背筋をピンと伸ばした。そのせいでザックの重みが全て後ろにかかってしまい、ゆっくりと仰向けに倒れてしまった。

「しまった！ 身動きが取れないです！」

ジタバタと立ち上がろうとするその姿は、まるでひっくり返った亀のようで実に滑稽だった。だが、大学生にもなってこんな醜態をさらしたままにしておくのはあまりに忍びないと感じ、傍まで駆け寄り、ザックを思い切り引っ張り上げた。

本当に重い。普通の女性が背負って山登りできるレベルではなかった。

「ありがとうございます！ もう大丈夫です！」

立ち上がった牛嶋さんは笑顔で答えているが、額にはじっとりと汗をかき、顔は真赤になっていた。大荷物を背負いながらの登山は無理だろう。

「何が入っているのかは知らないけれど、そのザックは俺が持つよ」

「いいえ大丈夫です！ 先輩方には迷惑を——」

「俺は君と同じで一回生だよ。同学年なんだから大丈夫でしょ？」

「……でも」

牛嶋さんはしどろもどろに辺りをキョロキョロと見渡していると、

「彼の好意を無駄にしちゃいけませんよ」と増長天の沼田さんが笑顔で答えた。それを確認すると牛嶋さんは少しほっとしたように俺のほうを向いた。

「……じゃあよろしくお願いします！ ホントはもうぶっ倒れそうでした！」

今さっきまでぶっ倒れていたよと、冗談を言うと「そうでした」と照れながら答えた。そんな牛嶋さんの表情はとても愛らしく、その瞬間、心の奥底に暖かい火が灯り、自分の世界がパツと広がるのを感じた。

自分自身、こんなにも惚れやすいとは思わなかった。

「大丈夫か角井？」

登山途中、一週間前とは微妙に違う鳥マスクを被った鳥人間——でなく千鳥が声をかけてきた。

「ははは……余裕です余裕。千鳥さんの方こそ、鳥マスクをして息苦しくないんですか？」

「鳥ではなく、啄木鳥だ。嘴が鋭く尖っているのに気が付かないのか？」

「……ですよね。どう考えても啄木鳥ですね。今度から気をつけます」

うむ気をつけろ、と千鳥は啄木鳥マスクを優しく撫でながら、一人でスタスタと前を歩いていった。

須弥山は傾斜も緩やかで、また風の通りもいい。本来ならば口笛を吹きながら楽々と登っていきけるのだが、牛嶋さんのクソ重いザックを背負いながら歩くとなると、事情は変わってくる。気が付けば全身は汗にまみれ、アンダーウェアが肌に張り付いている。バッグを支えていた腰は悲鳴をあげ、足は棒のように固まっていた。

他の四天王達が談笑しながら歩いている姿を見ると、安請け合いするんじゃないかと思ってしまうのも事実だったが、さすがにそれは情けないし、なによりずっと俺の後ろでバッグを支えてくれている牛嶋さんに、申し訳が立たない。

「大丈夫ですか！ 私はいつでも交換しますよ！」

「大丈夫だよ……それにもうすぐ山頂なんですよ？」

「だと思います！ さっき先輩方がそのような事を言っていましたからね」

「じゃあ最後まで背負っていくよ。ここで交換したら負けたみたいになるしね」

「……分かりました！ なら最後まで私もサポートさせて頂きます！」

牛嶋さんはそう言うと、バッグをグイグイと押し始めた。重みは分散されて楽にはなるのだが、そこまで強く押されるとペースを上げざるをえなくなる。正直きつい。だが彼女は彼女なりに頑張っ

いて、悪気なんてないようなので何もいう事が出来ず、歩幅を少しだけ大きくして、なんとか耐えてみる。

それから五分もすると「角井！」と上のほうから呼ぶ声がした。顔を上げると木場が大きく手を振りながら、「もうすぐ着くぞ!」と叫んでいた。さすがにこの時は、偉そうな木場の声も、天使の歌声のように感じられた。

山頂に着くと、視界には標高三百メートルから望む街の風景が広がっていた。さぞ美しく広大な景観なのだろうが、今は風景を楽しむよりも、「喜見城」という大袈裟な看板のかかった小さな山小屋の方に目が向いた。

もう城でもなんでもいいから、そこで大の字になって寝てしまいのが本音だ。

そんな俺の様子に気付いてか、蛇蔵が駆け寄ってきて、「はい、お疲れ様」と声をかけ、重いザックを代わりに持ってくれた。

「わっ先輩！ 後は私が持って行きますよ」

牛嶋さんが慌ててザックを持とうとするが、蛇蔵はいいからいいからとやんわり断り、

「俺のことより、ここまで背負ってくれた角井君をねぎらってあげてよ」

と続けると、俺にだけ見えるように小さくウィンクをして、そそくさと山小屋の方へ足を進めていった。さすがはプレイボーイ（何度とも言いが勝手な想像）の蛇蔵。空気を読む力は半端ではない。

「あの——本当にすいませんでした！ 私のせいで」

牛嶋さんはこれでもかというほど腰を曲げお辞儀をしてきた。おそらく九十度は腰が曲がっている。ここまですぐと人によつては嫌味に感じるかもしれないが、悪気はなく誠心誠意を込めているのだろう。

「いいよいいよ。俺が言い出したことだしね」

「でも、大変なご迷惑をおかけしてしまいました！」

「大丈夫だって。それより頭を上げてよ」

牛嶋さんはゆっくりと頭を上げ、申し訳無さそうな顔を作っていた。そんな顔されると対処に困ってしまう。蛇蔵が空気を読んでくれたのに、これではまともに会話すら出来ない。そんな時、再び偉そうな木場の声が聞こえた。

「そこの新入生コンビ！ 着いたんならさっさと城の中に入って食事の準備を手伝えー！」

やっぱり城なんですな、あの山小屋は。

城内？ は実に簡素なもので、キャンプ場にあるコテージのような印象を受けた。置いてある家具は全て木造で、木が放つ独特の香

りが田舎を思い出させた。少しだけ故郷に思いを馳せていると、キッチンから聞き覚えのない声が聞こえた。

「君達が新しい四天王かー」

ひょいと目の前に現れたのは、スーパーマリオのような髭を生やしたオッサンだった。服装はマリオのようなオーバーオールに赤が貴重服ではなく、Yシャツにチノパンといったラフなスタイル。身長が高く、百八十センチはあるだろう。マリオというよりはルイージだ。

「あの、どちら様ですか？」

「おっと自己紹介がまだだったね。私はここ、喜見城の主で、釈泰三といいます。以後お見知りおきを」

にこやかに答えるルイージ、ではなく釈さんにどうもと一礼すると、「もう食事の準備はできてるから」と奥に案内された。

案内された先には、待ちくたびれたと言わんばかりに先輩四天王の面々が睨みつけてきた。それもそのはずである。目の前には高級料理店に引けを取らないほどの豪華な食事が並んでいたのだ。

「遅れてすいません」と牛嶋さんは空いていた席に座り、俺もその横に腰を下ろした。できれば手を洗いたいと思っていたのだが、そんな事を言って先輩を待たせる勇気を、俺は持ち合わせてはいない。

全員揃ったのを確認すると、木場と沼田さんがすっと立ち上がり、

交互に口上を述べた。

「えー……今年もこうして無事に今日という良き日に迎えられたことを須弥山の神々に感謝し、新たな王として——南の増長天より『牛嶋素子』」

「東の持国天より『角井大和』を迎え入れる所存にございます。どうぞ、暖かくお見守り下さいませ」

よく分からない口上を述べ終わると、二人は合掌し、それに続いて残りの四天王も手を合わせた。隣の牛嶋さんもまた然り。おいおいなんだこれ、聞いてないぞ！ と焦ったが俺もそれに倣って合掌した。

「——いたっだきつまっす！」

木場がどこにアクセントを入れてるのか分からない程、気合を入れた声を出すと、これまた残りのメンバーも、

「——いたっだきつまっす！」と続いた。俺も一步で出遅れたものの、それに合わせて声を出した。

食事中は皆談笑しながら、目の前に広がる美味な料理達に舌鼓を打った。アルコールはなかったものの、皆テンションが高く木場に至っては「なんか物真似しろー」と無茶振りしてきた。俺は仕方なく、鹿せんべいをねだる時の雄鹿と雌鹿の微妙な違いを再現してみたが、あまりにマニアックすぎてダダスベリだった。上手くできて

いるのだが、世間一般では通用しないらしい。

だが世間一般では通用しない存在である千鳥だけは、予想以上に食いついてきて「鹿の生態について」説明するように訴えてきた。平均的な奈良県民である俺は、人に説明できるほど鹿を知らないし、愛着を持っているわけでもなかった。

返答に困っていると、今度は話をすり替えて「鳥類とはどういったものなのか」という千鳥なりの講釈を延々と聞かされた。

食事が終わると増長天大学の面々はふっとどこかへ消えてしまい、喜見城には持国天大学の四人と釈さんだけが残っていた。

牛嶋さんに電話番号でも聞こうかと企んでいたのも、実に口惜しい。急にやる気がなくなって部屋においてあったソファに横になると、満腹感と疲労感からか、一瞬にして意識を失った。

ゴツン！ 頭に鈍い痛みが走ると、ふと我に返った。

「起きろ角井」

寝ぼけ眼ながらも、拳骨を作った木場の姿が見え、この鈍い痛み
の原因は木場だと一瞬で分かった。

「……おはよう、ございます」

「おはようじゃないっつーの！ 次は角井の番なんだからさっさと

準備をしろ」

「俺の番？ 準備？」

ズドン！ とまた頭に痛みが走る。本気で殴ってるよコイツ。

「いいからこれに着替えろ」

木場が紙袋を手渡してきた。中を確認すると武士が切腹する際に着る白い着物が入っていた。血が綺麗に付きそうな白装束を俺に渡して、一体どうする気だ。切腹しろってことか？

「これに着替えるんですか？」

「そうだ、早く着替えろ」

「なぜですか？」

木場は苛立ちを隠さずに言った。

「これから儀式に必要なんだ。お前を王にする為の儀式にな」

白装束に着替えている間、その後ろで木場は面倒くさそうに説明した。

「四天王っていうのは、四人の王って事なんだよ。一人一人が王になって初めて四天王なんだ。だからこれからお前を王にしなければならぬ」

分かるよな？ と同意を求めてきたので、俺はパンツ一丁で頷いた。

「で……王になるには、ここ須弥山にある御神木に祈祷し、精霊を呼び寄せ、従わせる事が必要なんだ。だからこれから精霊を授かる儀式をする為に御神木の所に行くんだよ」

「精霊を使役して初めて王となり、四天王の一員になれる——と言う事は、その精霊を使って他の大学の四天王達と戦争をするって事ですよね？」

俺の返しに、なかなか察しがいいなと木場は満足そうだった。

「そう、この儀式が済むと晴れて角井は立派な精霊使い——四天王って訳だ」

精霊とかまだ言っているんだなこの人は。そんなのいるわけがないのに。

「ちなみに、増長天大学の人達はお前が寝ている間に精霊を授かって、もう下山し始めたからな」

マジかよ。これで完璧に牛嶋さんの連絡先を聞くタイミングを失った。そっちの方が精霊なんかよりもよっぽど重要だったのに。

……寝た俺が悪いのか、と後悔しながらも、一応木場の指示だけにはきっちり守り、白装束の帯をぎゅっと締め、襟元を正した。

「はい着替え終わりました。こんな感じで——」

振り返って木場を見ると、そこにはあり得ないものが映っていた。木場の背中に寄りかかるように、全長二メートルはあろうかという大きな『狼』が、牙を光らせながらこちらを見ていた。体がピーンと張って動かない。声も出ない。

「……どうした角井？」

「木場さん……背中」

「背中？」

「背中に……狼が」

「ああコイツの事か！」

木場は寄りかかる狼に臆した様子もなく、その頭部をくしゃくしゃと撫で始めた。

「コイツが俺の精霊だ。白い狼と書いて『白狼』という」

名前はポチだと付け加えると、後ろの白狼ことポチが「バァアウ！」と吼えた。思い切り唾がかかるが、それでも俺は動けなかった。唾を拭うことができないほどに、信じがたい光景に目を奪われていた。

そんな俺の様子を見た木場は、白狼と呼んだ精霊をなだめた後、ニタァッと含んだ笑いを見せた。

「だから俺は『白狼の王』と呼ばれている。カッコイイだろ」

ハイキング？

須弥山の御神木は山頂から少し下った傾斜の激しい山道（獣道といっても相違ない）の先にあるらしく、木場は俺だけでなく蛇蔵と千鳥を連れ立って歩き始めた。

とは言っても、木場は自分の精霊であるポチの背に跨っており、随分と楽をしている。

「その白装束は釈さんが霊気を込めて編んだものだ。だから今まで見れなかった精霊が見えたり触れたりできるようになるんだ」

このように木場から説明を受けたものの、根本的に事情が把握できていない俺は、そういうものなのだと納得しておくしかできなかった。

「あんまり深く考えない方がいいよ。俺も初めて見た時は、角井君と同じように声もあげられなかったからね」

隣を歩く蛇蔵が声をかけてきた。白装束を着るまではそれにやりわりと答えられたのだが、今の俺には引きつった顔で苦笑いをするしかできなかった。

蛇蔵の身体をぐるぐると、緑を基調とした斑模様の『大蛇』が巻き付いているからである。

「……ああ今の角井君は精霊が見えるんだったね。紹介するよ。これが僕の精霊で『毒蛇』のいちごちゃんだ」

蛇蔵に巻きつくいちごちゃんが「シャアア」と二枚舌をちらつかせてきた。

「可愛いと思わない？」

身体を締め付けられている状況で、その毒蛇を可愛いと言えるのは、蛇蔵か畑正徳こと、ムツゴロウさんぐらいだ。そもそも木場といい蛇蔵といい、ポチとかいちごちゃんとか……なんというネーミングセンスの無さ。心の中でいろいろと突っ込んでみるものの、口に出しては言えないので、代わりの質問をぶつけた。

「……じゃあ蛇蔵さんは『毒蛇の王』とか呼ばれているんですか？」

「いや、俺は『大蛇の王』と呼ばれているんだ。王の通り名を決める時は、その精霊を授かった時の第一印象で決められるんだ。第一印象では毒があるかなんて分からないので、見たままの大蛇って事で落ち着いたんだ」

白狼の王に、大蛇の王……確かにどちらも見た目重視のネーミング。となると気になるのが千鳥の精霊とその通り名だった。

俺よりも後ろをマイペースで歩く千鳥を見る。啄木鳥マスクの真横、つまり肩の上に小さな白い鳥が乗っかっていた。先ほどまでは、この白い鳥が見えなかったのだから、間違いなく千鳥の精霊だろう。蛇蔵が蛇の精霊なのだから、あの鳥人間が鳥の精霊である事は予想はついていたのだが、もっと巨大で不気味な怪鳥を従えているので

はと思っていた。

「千鳥さんの精霊は木場さんや蛇蔵さんと違って可愛らしいですね」
率直な感想を述べると蛇蔵は、口に手をつけてクッククツと声を洩らした。

「千鳥ちゃんの精霊のどこが可愛いんだい？　むしろあれ以上に不気味で恐ろしい精霊はいないと思うよ」

「えっ……でも、小さくて真っ白で可愛いじゃないですか」

「あの肩に乗ってたてるのは、可愛いよね。でも周りをよく見てごらん」

蛇蔵に言われたとおり、辺りをゆつくりと見渡してみた。登山コースではないため、野放しの自然に満たされており、木々が複雑に絡み合う植物群落だった。本来ならばこのような自然を美しいと感じるのだが、どういうわけかあたり一面からは異様な雰囲気しか感じられなかった。何者かに睨まれているかのような寒気を感じる。

「……まだ気が付かないの？　ほらあそこを見てみなよ」

蛇蔵が指を指す方に目を向けると、その視線の先に漆黒の塊があった。

『鴉』だ。しかも一羽だけではなく何十羽もの鴉。

「……もう一度ぐるっと見渡してみなよ」

言われたとおり再度辺りを見渡してみた。先ほどまでは気が付かなかったが、よくよく見てみると鴉が、三百六十度全てを包囲していた。両手で数えられないほどの鴉の群れ。

「千鳥ちゃんの使役する精霊は、千羽に及ぶ鴉の群れ。よって通り名は、『烏合の王』」

ゾクッと背筋が凍るような感覚を覚えた。確かに蛇蔵の言うように、不気味で恐ろしい精霊だった。千羽の鴉を操って戦う千鳥の姿を想像するだけで、叫びたくなるほどの恐怖を感じた。

一羽倒してもまた一羽、それを倒してもさらにもう一羽。途切れる事のない無限ループ。

「同じ大学で良かったでしょ？」

蛇蔵の優しそうな声に、思い切り首を縦に振った。

恐る恐る千鳥の方を伺ってみると、肩に乗っかっていた白い鴉が、きょとんとした表情でこちらを見返してきた。

「あの白いのは鴉じゃないですよね？」

「いや、あれも鴉だよ。千羽に一羽の割合で白い鴉が生まれるらし

いよ」

「千羽に一羽なんですか？ 結構高い割合なんですね。でも俺今まで一度も白い鴉なんか見たことないですよ」

「白い鴉は普通の鴉に仲間だと認められなくて殺されちゃうんだってさ。可哀想だよな」

だから千鳥の肩にいるのかと、変なところで納得してしまった。

「今日は千鳥ちゃんの事より自分の事だよ。角井君はどんな精霊を御神木から授かるのかな」

「俺ですか……さあ皆目見当が付きません。精霊の存在を理解したもの、今日その精霊を授かる事を知ったのも、ついさっきですから」とは答えたものの、今までの流れから考えるとあの動物の精霊だろうなという予測はついていた。

「俺が思うに、角井君の精霊は——鹿だろうね」

自分の予想とドンピシャ。やはり鹿だった。

「精霊って言うのは個人の性格や環境に大きく左右されるんだ。角井君は奈良の人でしょ？ 小さい頃から鹿と身近に接して来たはずだから、必然的にそうなると思うよ」

「じゃあ奈良県民の精霊はほとんど鹿ですね」

そうかもね、と蛇蔵と笑いながら相槌を打った。

木場の後に続いて山道を抜けると、目の前には一本の巨大な杉が聳え立っていた。

「あれが須弥山の御神木。精霊宿りし奇跡の古木」

隣にいる蛇蔵が感慨深く口を開いた。以前テレビで観た屋久島の縄文杉にも引けを取らない大きさで、あまりの迫力にだらしなく口を開けたまま杉を見上げてしまった。木ならば、田舎者扱いされないだろう。その辺に生えている樹木とは存在感が桁外れに違っていた。

「何ボケツとしてんだよ角井。早く行けよ」木場が俺の背中を叩いた。

「えっ……行けてどこに？」

「そんなの御神木の所に決まってるだろうが、お前の精霊を貰いに行くんだからな」

はいはい行けばいいんだろ行けば、と心の中でブーたれつつも御神木に近づいていった。

手を伸ばせばゴツゴツした樹皮に触れられる距離まで来たのだが、ここから先どうすればいいのか全く分からない。

「……で、どうすればいいんですか？」

振り返って木場を見ると、「俺説明したしー」的な顔をしゃがった。自分の名誉のために宣言しよう。何の説明も受けていない。そんな俺を尻目に、木場はかつたるそうに声を出した。

「右手で軽く触れながら、『精霊様カモオオン！ カモオオンベイェェ！』と大声で叫べ」

「――何の罰ゲームだよ」

木場が先輩である事を忘れ、思わずタメ口で突っ込んでしまった。木場がギロツと目を吊り上げて睨んできた。

「罰ゲームじゃなくて儀式だよ。腹の底から精霊たちに届くようにシャウトするんだ」

シャウトですか。何故大学生にもなってこんな事をしなければならぬんだ？

「嫌そうな顔しない。さっさとやれ！」

「わかりました。精霊様カモーン……カモーンベイバー」

「声が小さい！ もっと大きな声を出せ！」

「だってこんなのが儀式な訳ないじゃないですか。絶対悪ふざけですよ」

「なんだよ角井！ 俺の言葉が信じられないのか！」

木場の言葉ほど信じられぬものはない。元を辿れば、木場が自分を新人生と偽ったことから始まっているんだぞ！ と言いつ返してやりたかったが、そこは何とか堪えることができた。それでも不服そうな顔だけはそのままにしておく。

「仕方ないな。もう一度説明してやるよ」木場がだるそうに口を動かした。

だから、一度も説明してもらってないんだよ。

「今お前は、釈さんが靈気を込めて編んだ白装束を着て、普段は体内に閉じこもっている自身の靈気が、微量ながら身体を覆っているんだ。この状態で大声を出すと、身体中の経絡系——靈気の通り道を通して、声と同時に口から大量の靈気が発せられる。これを『発勁』という。ここまでいいよな？」

経絡系とか発勁とか聞いた覚えのない単語が出てきたため、正直な所全然良くない。だが、木場なりに優しく教えてくれているのは分かったので、ここは何も言わなかった。

「発勁をして靈気を放つと、その全てが御神木に吸収され循環して

いく。すると、御神木に宿る精霊たちは必然的に角井の霊気に直接触れることになる――分かるよな？」

なんとなく、と答えてみる。

「すると、霊力が充満された御神木の中で、お前の霊気に触れるのがたまらなく心地いい！　とを感じる精霊が一柱だけ現れてくる」

「ひとはしら？」

「精霊や神様の数え方だ。柱と書いて一柱、二柱と数えるんだ」

「神様にも数え方があるんですね。始めて知りました」

「人間如きが神様を数えるなんておこがましいが、便宜上仕方ないんだ――話を戻すぞ」

コホンと咳払いを一つ、木場は説明を続けた。

「角井の霊気を気に入ったその一柱は、それに惹き付けられ、御神木から姿を現す。その精霊こそが、お前の使役する精霊だ」

自分なりに要約してみると、大声をあげることでも自分の霊気が放出されて、その霊気が御神木に浸透し、木に宿る精霊がそれに反応し、ひょっこり現れるという事だ。

なるほど、確かに大声を出す必要性はあるようだ――が、

「今の説明だと、『精霊様カモン』とか叫ぶ必要はないですね。
『ああああ』とかでも精霊は出てきますよね？」

「なっ、そんなんじゃダメだ！ そんなの神に対する冒瀆だ。背徳的行為だ！」

木場の顔が一瞬引きつり、明らかに焦りだした。声も心なしか上擦っついて、俺の指摘はどうやら凶星らしい。

「『ああああ』なんてふざけるなよ！ テレビゲームで名前を決めるのとは訳が違うんだから——」

「——木場さん。もう角井君は気付いちやっていますから、騙せませんよ」

横から蛇蔵が素敵スマイルで木場をなだめると、木場はグツと握り拳を作った。

「……くそ、ああそうだよ！ ちつくしょう！」

顔を真赤にしながら悔しそうに答えた木場を見て、俺はうつすらと笑った。やっぱりな、もう二度と騙されてやるか。

「くそ……これで二年連続じゃねーか。千鳥もその事に気付いて『精霊様カモン』とは言わなかったしよ」

後で聞いたことによると、精霊を呼ぶときに『精霊様カモオオン！ カモオオンベイベエ！』と叫ぶのは代々伝わる先輩四天王の楽しみだったらしい。だが本来は腹の底から声を出しさえすれば、充分に精霊を呼ぶことが可能で、言葉は特に関係なかった。

「ちなみに……千鳥さんはなんて叫んだんですか？」

そう尋ねると千鳥は自信ありげに答えた、

「『クックドゥードゥルドゥー』と叫んでやった」

それも、どうかと思う。

「もう何でもいいからさっさとやれよ！」

本場は大声を出し俺を急かした。騙し損ねた事で不機嫌になり、声には怒気が混じっていた。

「わかりましたよ」と一言だけ残すと、御神木の前に向きかえって深呼吸をした。『精霊様カモオン』だけは何とか免れたが、結局は大声で叫ばなければならぬので、多少の気恥ずかしさはあった。

だが、東京に出て来てから腹の底から声を出すという事がなかつ

たので、日頃の鬱憤を晴らすにはちょうどいい機会だ。御神木に自分のストレスをぶつけるというのは罰当たりな気もするが、そのくらいやんわり受け止めてくれてこそ神様だ。

俺は肺にこれでもかというほど酸素を送り込み、そして呼吸を止める。身体を後ろに反らし、鬱憤と共に一気に吐き出した。

「バツカヤロオオオオオ！」

俺の叫びに反応するかのように御神木がブルツと震えだし、それに呼応するように御神木が「バカヤロー！」と返してきた。一瞬ビツクリして尻餅をついたのだが、どうやら俺の声が自分の予想以上に通ったらしく、ただ山彦が返ってきただけだった。

「そんなところに座ってないでこっちに戻って来い。そこにいると精霊が出てくるのに邪魔になる」

木場に呼び寄せられるままに俺は御神木から離れていき、そのまま隣にならんだ。

「随分と気合の入ったバカヤローだな。それはもしかして俺の事か？」

「さあどうでしょう？　まあ声のボリュームは充分出たからいいじゃないですか」

木場の嫌味をすつとかわすと、木場は「ケツ」と言いながら、御神木の方に目をやった。俺もそれに倣って御神木の方を向いた。

「……精霊出ませんよ」

「……出ないな」

「……出ないねえ」

「……」

大声を出した後、既に十分ほど経過していたが、一向に精霊が出てくる気配はない。相も変わらず御神木は悠然と立っていた。

「普通はどのくらいで出てくるものなんですか？」

蛇蔵に聞いてみると、

「……大体二、三分じゃないかな。俺のいちごちゃんもそのくらいだったし」と返してきた。やはり遅いらしい。

「やっぱり『精霊様カモオオン！ カモオオンベイベエエ！』じゃなきゃ駄目なんじゃねーの。もう一回やって来いよ」

「嫌ですよ。第一何でもいいからさっさとやれって言ったのは木場さんじゃないですか。それにもし『精霊様カモーン』だったら千鳥

さんは精霊を呼べなかったですよ」

「だったら角井も『クックドゥードゥルドゥー』と叫べばいい。それなら恥ずかしくないだろう」

今まで無言を貫いてきた千鳥が、横から割って入ってきた。まるで『クックドゥードゥルドゥー』というのが当たり前のように毅然としていた。

「いや……むしろそっちの方が恥ずかしいです」

「そうか、角井は変わってるな」

鳥マスクの女子大生には言われたくない。

「――あっ！ あそこ何かおかしくないかい！」

蛇蔵が急に声をあげ御神木を指差した。だが、どう見ても変化は見られない。

「……別に何も変わっていないような気がします」

「根元の方だよ！ ほらあそこになんか出てるって！」

言われた場所を見ると、根元の部分に二本だけ、小さな枝のようなものが不自然に生えていた。

「ここからじゃよく分らんな。近づいてみるか」

木場に従い御神木に近づいてみると、それは枝ではなく――間違
いなく角だった。

「なんだこれ。なんでこんなものが根元の方に、角が生えてるんだ。
っーか何の角だコレ」

木場が不思議そうに角に触りながら答えた。蛇蔵も千鳥もまた同
様に首をかしげていたが、俺だけはその角がなんなのか一発で分か
ってしまった。やっぱりそうだったんだなと思った。

「鹿ですよコレ。雄鹿特有の角です」

おそらく、いや間違いなく、この角だけ出した鹿が俺の精霊だ。

「やっぱり鹿か」と木場は呟き、「予想通り鹿だね」と蛇蔵はにん
まり笑った。

千鳥に至っては「鹿しか考えられなかった」とくだらない駄洒落
を言い出す始末。

「……とりあえず引っ張り出しますか。頑丈なので折れたりしま
せんから」

全員が相槌を打ち、木に埋まった鹿の角をつかんだ。

「じゃあ行くぞ。いっせーの、せっ!」

木場の合図に合わせて思い切り引っ張りあげると、ゆっくりと鹿の顔が生えてきた。その鹿の口には何故か、プラスチックで出来た角の生えた、クリスマスによく見るトナカイの角のようなおもちやをくわえていたが、引っ張り出す事に夢中で、誰も触れることはしなかった。

「もう一回だ。いっせーの、せっ!」と再度力を込め引っ張った。

すると今度はズブズブズブっと音を立てて、一気にその全身を現した。紛うことなく――鹿だった。奈良でよく見かける雄鹿そのものだった。

鹿は引っ張りあげられたまま、地面に伏していた。顔を近づけてみると、かすかだが呼吸をしているので、どうやら眠っているだけの様子。

「やっぱり鹿だったね角井くん」

予想が的中して満足そうな蛇蔵が声をかけてきた。

「そうですね。やっぱり鹿でした」

「鹿となると……角井君の王としての通り名は『鹿の王』って所かな?」

「それでは、しまりがないだろう。立派な角が生えているから『角鹿の王』ってところでどうだ？」

木場が会話に割り込んできて、勝手に通り名を決めようとしていた。

「『角鹿の王』ですか……うん。鹿だけよりはいいですね」

「だろ！ さすが蛇蔵は分かってんな」

「——いや、全然分かっていないぞ人間ども」

さらにその会話を割って、聞き覚えのない男性の声が聞こえてきた。

「……えっ？」

「えっ？ じゃない。我はお前等に全然分かっていないぞ、と言っただ」

その声は、俺はもちろんのこと、木場や蛇蔵、千鳥でもなかった。声は、さっき引っ張りあげた鹿の口から聞こえてきた。

鹿が……喋っている？

「いつまで固まっておるつもりだ……小僧」

鹿はくわえていたおもちゃの角から口を放し、ゆっくりと立ち上がり俺達の方を見つめてきた。

「もう喋ってるぞこの鹿！　すげーな」

「つまりそれだけ角井くんとこの相性がいいんでしょうね。俺の時は、まともにコミュニケーションをとるのに、二ヶ月もかかったのに」

木場と蛇蔵は、まるで鹿が喋るのが当然だと言わんばかりに話をしていた。

「小僧とは違い、その狼男と蛇男は多少は話が分かるようだな……だが、まだまだ全然分かっておらんな」

「そっか。俺達も全然分かっていないのか。つーか何が？」

木場と鹿が普通に言葉を交わしている。なんだこの状況は？

「見て分からねぬか狼男よ。どう見ても我は――」

「――鹿じゃないか！　鹿のくせになんで流暢に日本語喋ってるんだよ！」

理解の範疇を飛び越えた俺は、思わず声を荒げていた。自分だけ

仲間はずれになっているようで、どうも居心地が悪かったのだ。鹿はそんな俺の方に顔を向けると、その場に立ち尽くしたまま、じっと見つめてきた。

「だからそれが分かっていないと言うのだ小僧。お前の目は節穴か？」

「じゃあ何が分かってないのか、はっきり言えよ！」

鹿は首をブルブルと振った後、「いいかよく聞けよ」と睨みつけるように俺の顔を覗いてきた。

「我は鹿ではない！ 我は『馬』だ！」

……何を言い出すこの鹿は？

「UMA？ 何寝ぼけた事を言ってるんだ。どう見ても鹿だろうが！」

「寝ぼけておるのは小僧の方だ！ 我はどう見ても馬だろうが！」

「何言って——」

「——ちよつと落ち着け角井」

ポンと肩を叩かれ振り返ると、目をキラキラと輝かせた木場がいた。どう考えても目を輝かせるような状況ではないにもかかわらず、なぜか木場はウキウキしていた。

「なあそこの精霊様。アンタは鹿ではなく、馬なんだよな？」

「だからそう言っておろうが、第一どうみたら我が鹿に見えるのか
が不思議でならない」

黒目がちな丸い瞳、ふっくらしつつも引き締まった胴体に、細くも強靱な足。なによりも三本に枝分かれた角が、鹿であることを物語っている。それでもこの鹿は自身を馬だと言い張る。

何をバカな事を言って……ああっ！

「そっかそっか、鹿のように姿をしても……馬なんだな」

「何度も言わせるな。我は馬だ」

自信満々に言い切る鹿に、木場はニヤニヤしながら俺の顔を見てきた。そうか、だから木場は笑っているのか！

冷静さを取り戻した俺は、木場の目がキラキラしだし、ニヤケ顔

になった理由に気付いた。

「ちよつと——」

「——蛇蔵に、千鳥！ たった今、角井の王としての通り名が決まった！」

これから木場が行うであろう動きを制止するため声をあげたのだが、さらに大きな声を出した木場に、発言権を奪われた。

まずい、これはまずいぞ。

蛇蔵は腹を抱えながら笑っていた。千鳥も鳥マスクをしている為表情は分からないのだが、微妙に肩がピクピクと動いている。

「ちよつ——ちよつと待って！ 『角鹿の王』にしましょうよ！ この名前すごく気に入りました！ 超カッコイイネーミングです！」

俺が慌てて声を出すも、木場は聞く耳を持たない。

「たった今、持国天大学に新しい王が誕生した！ 自身を『馬』と言う『鹿』の精霊を役とする王には、この通り名こそふさわしい！ さあ叫ぼう我が同胞達！ その王の名を高々と掲げよう！」

——その王の名は『馬鹿の王』なり——

俺以外の四天王は一斉に爆笑し始めた。その様子をポカーンと見ていた鹿……ならぬ『馬鹿』は俺の方を見やった。

「よく分かんが小僧……お前は馬鹿の王なのか？　どうりで理解力が乏しいわけだ」

「お前がその『馬鹿』なんだよ……」

この日より四年間、俺は『馬鹿の王』として四天王の一翼を担う事になったのだった。

修行？

五月中旬のよく晴れた昼下がり、俺は一枚の紙を手を持ちながら、震えていた。その紙は持国天大学の大学新聞「持国天通信」の五月号。

『新たなる王の誕生！ その名は馬鹿の王！』

という見出しの横に、俺の不機嫌そうな顔が大きく載っていた。この新聞のおかげで、先ほどこから、いろんな人に奇異の目を向けられていたのだ。

ゴールデンウィーク中に新聞部の方から直々に取材の依頼を受け、謝礼も出るとの事だったので承諾したのだが、まさかここまで大々的に掲載されるとは思ってなかった。

持国天通信は一般的な大学新聞とは大きく異なり、最新のエンタメ情報から近隣の居酒屋やショップのクーポンなど、若者が食いつきそうなネタが掲載されており、ここの学生なら必ず目を通すという程人気がある。

そんな事とは露知らず、謝礼に釣られてインタビューを受けてしまった自分が恥ずかしい。しかもその謝礼が、安い作りのストラップだったから、なおの事情が無い。

「あつ、馬鹿の王だ」

「ホントだ……なんか普通だね」

誰かが俺に気付いて指差した。一瞥するとすっと顔をそらしたのだが、笑っているのだから、憐れんでいるのだから分らない表情をチラリと見えた。

「すっかり有名人だな——馬鹿の王よ」

いつもより少し高めの声で話しかけてきたのは、ここ最近機嫌が良い木場だった。この機嫌の良さは間違いなく俺が『馬鹿』の王と呼ばれる事がとても愉快だからだろう。実に性格の歪んだ野郎だ。

「……おかげ様でどこに行っても馬鹿の王ですよ。やってられません」

「まあまあそう気落ちするな。むしろここまで周知の事になったんだから、開き直ってみたらどうだ？」

確かに木場の言うとおり、ここまできたら開き直るのもアリだ。たとえここで四天王をやめたとしても、馬鹿の王という忌まわしきレッテルは剥がせない。完全に逃げ場を失ってしまった。

「……そうですね。逃げるところもないし、もう突き進むしかないですね」

「いいぞ角井！ その気持ちの切り替えがなによりも重要だ」

木場は大笑いしながら俺の背中をバンバンと叩く。地味に痛い。

「そうだ角井。お前これから暇か？」

「いえ、三限と四限に講義があるので夕方までは」

「じゃあその後でいいや、講義終わったら部室に來い」

「……なんですか？」

俺はサオリ以来、持国天大学四天王同好会の部室には足を運んでいなかった。元々あそこの雰囲気が悪手なのもあるが、誰からも来るように言われなかったからである。こんな風に思いついたように呼ばれる理由が分からなかった。

「今日は解禁日なんだよ」

「解禁日？」

「そう、今日から『四天王杯』に向けての練習開始日なんだ」

ああそうか、いよいよ『四天王杯』が始まるのか。

四天王杯とは元來、神々に対しての奉納試合の事を指す。普段我々の見えない所で尽力している神々に心から謝意を表し、精霊を役とする人間が、精霊と共に神の面前で死力を尽くして戦い、日頃の

疲れを労い楽しませようという伝統があった。

勿論今でもその伝統は受け継がれているが、四天王杯は時代を重ねる毎に形を変え、徐々に衰退していった。

それでもなお日本に住まう八百万の神々は、四天王杯を望み、今では持国天大学を含む四校のみに規模を縮小したものの、この真夏の戦争を年に一度の楽しみに、選ばれた者にだけ、人間の身の丈に合わない力を授けている……らしい。

聞いてみてもよく分からないのだが、四天王杯こそが、木場の言う『戦争』にあたり、四天王同好会の主な活動で、どの大学もこの四天王杯に向けて、神々に喜ばれる熱戦を見せる事と、大学の威信のために、必死こいて鍛錬するのだ。

俺の場合、馬と名乗る鹿——つまり馬鹿と一緒にだ。実に気が重い。

四限が終わり部室に寄ると木場が長机に横になり、行儀悪く眠っていた。身体を揺すって起こすと「遅いんだよ馬鹿！」と何故か拳骨をくらった。理不尽極まりない。

「ふわあ……まあいいか。とりあえず鍛錬場に行くぞ」

「鍛錬場？」

「お前はいちいち語尾を疑問形にするな。前に説明しただろうが」

木場はどうしていつも説明した気になっているのかが分からない。

「前に説明しただろ」と言う場合、ほぼ百パーセント説明されていない。この場合は、木場には聞かずに後で蛇蔵に聞くのがベストだ。

「いいから行くぞ」

木場は立ち上がると、何もないベージュの壁を触りながら、何かぶつぶつと呟いていた。すると壁がまるでからくり屋敷のようにぐるっと回転し、木場は壁の中に取り込まれていった。

あまりの出来事にしばらく呆然としていて、再び壁が少し動き、隙間から木場が顔を出した。

「早く来い角井」

「……はい」

もうなんでもありだな。

壁をクルッと回転させ中に入ると、さらに地下へと続く階段があった。幅が狭く、段差が激しいのに加えて、電灯の一つ付いていなかった。唯一の光源は木場の手にしている懐中電灯だけで、どこまでこの階段が続くのかが見えなかった。

木場は慣れた様子でスタスタと階段を降り始めるが、俺はこの異様な光景にたじろぎ、なかなか足が進まない。地獄に続いているん

じゃないのかと錯覚してしまうほどの圧迫感があった。

「遅いぞ角井！ 置いてくぞ」

遙か下方から木場の声が聞こえて、俺は急いで階段を下りた。こんな所で置き去りになんてされたら――泣く。大学生だけど怖くて泣いちゃう。

やっこの思いで木場に追いつくと、木場の目の前にドアがあるのが見えた。俺を確認した木場はそのドアを開け中に入り、俺もそれに続いた。

急激に明るくなったのでなかなか目を開けられなかったのだが、徐々に目が慣れてくると、白一色で支配されたただっ広い空間が目飛び込んできた。

天井も床も壁も何もかもが白く、ふとドラゴンボールに出てくる「精神と時の部屋」を思い返した。

「ここが鍛錬場だ。これから毎日、俺とマンツーマンで修行してもらうぞ」

木場とマンツーマン。地獄に続いているのは事実だった。

「角井、ちゃんと『霊具』は持ってきたよな？」

「……霊具ですね。一応持ってきましたよ」

俺は背負っていたバッグから、あの馬鹿がくわえていたおもちゃの角を取り出した。須弥山で精霊を授かった時に、俺の精霊である馬鹿は、白装束を脱いだ途端に消滅した。精霊は使役者の霊気を媒介に実体化するらしく、白装束を脱いだ時に、釈さんの霊気に当てられ、強制的に体外に溢れていた霊気が途絶えたため、実体化がキヤンセルされたとの事。

「なら今どこに精霊がいるのですか？」と蛇蔵に尋ねてみると、

「精霊を授かった時に加えていた道具があったでしょ？ あれを『霊具』と言ってね。普段はそこの中にいるんだよ。精霊が御神木からこの霊具へと鞍替えしたって事だね」と分かりやすく説明してくれた。

「四天王は常に精霊と共にいなければならぬから、いつも手元においといてね」と蛇蔵はと付け加えたので、俺は仕方なく持ち歩いていた。もし蛇蔵が言ってくれなかったら、間違いなくバッグには入れず、ゴミ箱に入れていただろう。

「この中に、あの馬鹿がいるんですよね」

「そうだ。早速着けてみる」

黒いプラスチック製のカチューシャに、角が二本ちょこんと付属されていて、本当におもちゃにしか見えない鹿の角だった。大学生にもなって、こんな物を真面目につけるのは恥ずかしいのだが、言われた通りに角を着けた。

「……着けました」

「よし、じゃあ早速精霊を呼び出せ」

俺はこくと頷いて、精霊を呼び出そうと――しなかった。

「あの……木場さん」

「なんだ？」

「どうやって精霊を呼び出すんですか？」

木場がチツ、と舌打ちをした。そしてこれから恒例の『前に言っただぞ』が始まったのは言うまでもない。

「精霊を呼び出すには、霊具に霊気を込める事が必要だ。御神木でやった時と同様に、発勁を行い、お前の霊気を餌に精霊をおびき出すんだ」

一通り理不尽な説教を済ました後、木場は呼び出し方を説明し始めた。

「また大声をあげればいいって事ですか？」

「それでも呼び出せるが、その場合だと余分に霊気を使ってしまう。

だから今回は手から発勁を行う」

「手からも出るんですね」

「大声をあげるだけでいいから口での発勁が一番簡単だが、経絡系は全身を巡っていて出口もありとあらゆる場所にある。そして手での発勁は口の次にやりやすいし、なにより使い勝手がいい」

木場は手のひらを反して俺の方に向けてきた。

「手を握って中指と薬指の間に靈気の出口があって、そこから靈気を出す事ができる。気孔治療もここから気を出して治している。ちなみにここは『心包区』といって、押すとリラックス効果がある」

余計な豆知識つきだが結構分かりやすい。

今思うのだが、木場は説明を始めると、意外と丁寧に教えてくれている。だからこそ二度説明するのが嫌いだとか面倒だとか言うのだろう。まあ一回も説明してもらってないけれども。

「手で発勁するには、イメージがなにより大切だ。全身に巡っている靈気を自分の掌に集まってくるようにイメージし、そしてそれを外に放つ……といった感じだ」

掌を見つめながら、言われたとおりにイメージしてみるのだが、何かが出たりするような感覚はなかった。

「カメハメ波だ角井。カメハメ波を放つイメージだ」

木場がまた悪ふざけを始めた。そんなあからさまな嘘でからかう

はいいい加減やめて欲しい。俺はそれに頷く代わりに、じとつとした目線を木場に向けた。

「まさかお前、俺がまた騙そうとしているとか思ってるんじゃないだろうな？」

思い切り首を縦に振った。カメハメ波はさすがにない。

「違うぞ角井！　今回はお前を騙そうとしているわけではなく、本当にカメハメ波は手での発勁を覚えるにはちょうどいいんだ。手からなにか不思議な力を放出するイメージを想像する場合、カメハメ波は実に具体的にイメージしやすい」

「イメージしやすいですか？　カメハメ波が？」

「ほら、角井だって小さい頃にカメハメ波を出そうと真似したりしなかったか？」

「した事は……まあありますけど。でも実際にカメハメ波は出ないですし」

「ああもうグダグダ言わずにやれ！　先輩命令だ！」

木場の声が荒立ち、明らかに不機嫌になっていた。こうなると黙って指示に従う以外、機嫌をとる方法はない。仕方なく「分かりましたよ」と答えた後、足を大きく広げ、体を右にひねりながら腰を深く落とした。そして右脇腹辺りに両手を持っていき、手と手の間

に少し空間を作った。約十年ぶりのカメハメ波の溜めポーズがバツチリ決まった。

「よしいい感じだ。後は頭の中にカメハメ波を放つイメージを作る。そして身体中の力を全部掌に集めるように集中するんだ」

木場は実に痛いポーシングをしている俺を前にしても、決して笑う様子はなく真剣だった。もしかしたら冗談ではないのかもしれない。

「集中できたら今度は自分の前に敵がいると仮定して、そこにカメハメ波を撃つんだ。ベジータでもフリーザでもなんでもいい。あと、ちゃんと『カゝメゝハゝメゝ波!』って言えよ」

いちいち注文が多くてイライラするが、ここは自分が大人になって我慢し、木場の注文にしっかり答えることにした。ゆっくりと目を閉じて、カメハメ波を撃つ孫悟空の姿を脳内で築き上げ、力の全てを両手に集めるイメージを開始した。

気のせいかもしれないが、ほんのり暖かくなっているのを感じ、もしかしたら本当に撃てるかもと思ってしまった。

「カゝメゝハゝメゝ……」

ふと、幼き日の自分をふと思い返していた。当時はこんな馬鹿みたいな事を何の躊躇もなくやっていた気がする。転んで膝から血を流しても走り回っていたし、誰彼構わず浣腸をかましていた自分。そんな時期が確かにあったのだが、そんな幼い自分をいつの間にか忘れていた。

『――今だ!』

脳内に突然大きな声が響いた。それに後押しされるように「――波!」と溜まったものを吐き出すように声を出し、両手を正面に突き出した。目を瞑ったままカメハメ波を放った為、実際に出たかどうかは判断できなかったのだが、掌から全身に向かって一気に脱力感が襲い、精気が抜けるのを感じた。

立っている事すらできなくなり、そのまま膝から崩れるようにうつ伏せに倒れこんでしまった。

「……窮屈だったな。御神木とは大違いだ」

頭の中に響いた声が今度は耳を通して聞こえてきた。目を開けると、何故か頭につけたハズの鹿の角を握っている自分の右手があった。右手から湯気のような白い煙が勢いよく吹き上がっていて、その煙の先を目で辿っていくと、その先には一匹の雄鹿が悠然と立っていた。

「久しぶりだの、小僧」

「……どうも、お久しぶりです」

どういうわけか、畏まって挨拶する自分がいた。

修行？

「一発で成功させるなんて大したもんだ。しかもいい感じに精霊が実体化しているな」

木場に褒められるという人生に一度あるかないかという貴重な体験の前に、俺はどう返していいのか分からず「はぁ……」と声を洩らした。

そもそもこの現状が自分の理解できる領域を超越しているのだ。カメハメ波から鹿を出すという行為が、どれほどすごい事なのかという基準が、ここ最近おかしくなってしまったからである。

「何を間拔けな顔をしておるのだ？ 何か用があつて我を呼び出したのだろうか」

「まあ、そうなんですけど。俺にもどうすればいいのか」

鹿からの当然の問いかけに答えられず、木場に助けを乞うた。後頭部をワシヤワシヤと搔きながら、しょうがないなあといった表情で木場は鹿の質問を引き受けた。

「鹿さんよ——」

「鹿ではなく、馬だ」

「んじゃあ、お馬さんよ——」

「馬である事は認めよう。だが我には李超という名がある。そちらの方で呼んでもらおうか」

馬鹿のくせにこのプライドの高さはどこからくるのだろうか。なんとも面倒臭い鹿である。こんな癖のある精霊が俺のパートナーになって、他の四天王と戦わなければいけない事を思うと、かなり億劫になる。

今は相手をしている木場が自分以上にうざったそうにしているの
で、とりあえず放置。

「じゃあ李超よ。アンタは御神木に宿っていた精霊なんだから、四天王杯の事は聞いた事があるだろう」

「四天王杯！　なんとあの誉れ高き決闘に、我も参加できるという事か」

「そういう事」と返事をする、木場は俺の隣に近づいてきて肩をポンと叩いた。

「李超は、角井大和——馬鹿の王の精霊として、共に四年間きっちり戦い抜いてもらうぜ」

瞬間、李超は下唇を思い切り横にスライドさせた。そのスライド

つぷりは、あからさまに「我が小僧の相棒なのか？」と不満全開なのを読み取らせた。

動物の表情を読み取るなど一般的な人間には出来ないはずなのだが、その動物が一般的ではなく人語を操り、怒りという感情を見せてくる動物だった場合は話が別である。

「戦において、多少の足枷があった方が用心できるからな」

鹿はボソツと呟いたようだが、俺の耳にはしっかりと嫌味として届いていた。本当に不愉快な鹿だ。

「よし、じゃあ早速本格的に練習を始めようと思うのだが、その前に……」

木場は俺与李超の顔を交互に見た。

「李超も角井も、四天王杯がどういうルールで行われるか知らないよな」

思わず「えっ」と驚いたのも無理はない。いつも説明した気でいる木場がこの時に限ってはこれから説明するぞといった風に接してきた。なんとも珍しい。

「何ぼおろとしてるんだ角井、これから大事な事を説明するのだからちゃんと聞け」

「……はい」

よし、と木場は唸り、一呼吸置いた後、口を開いた。

「対戦方式は総当り戦をとり、一回生と四回生はそれぞれ同学年同士で戦い、二回生と三回生はペアを組んで、二対二でのタッグバトルを行う計三本勝負。二本取った方が勝利し、最終的に勝利数の一番多い大学が優勝するんだ」

道理で蛇蔵と千鳥がおらず、木場とマンツーマンで鍛錬に励まなければならぬわけだ。少しずつだが事情が読めてきた。

「それで木場さん。優勝すると何かいい事があるんですか？」

そう質問すると、木場は「良くぞ聞いてくれた」とばかりに笑顔を作って言った。

「優勝すると次の四天王杯がくるまでの一年間、真の四天王として君臨する事ができる。真の四天王こそ全ての四天王達の夢であり、我が大学生生活四年間の最大の願い！ 去年は毘沙門天、広目天に次ぐ第三位と振るわなかったが、最後のチャンスとなる今年こそは、絶対に真の四天王の座を勝ち取らねばならないのだ！」

腕をがつつり組みながら鼻息を荒くする木場は、いつもの数倍気合が入っている。まずい事聞いちゃったなと少し後悔し、真の四天王とかわけの分からない存在の事を忘れるように心がけた。

ようは各大学と三本勝負して二勝すればいいんだ。言い換えると先輩方が二勝してくれれば俺は負けてもいいって事なのだ。真の四

天王とか勝ち負けにこだわらず、まったりとやっていくぞと脳に命令したが、そうは問屋が――いや、木場が卸さない。

「いいか角井！ 俺が真の四天王になるには、お前の一勝が鍵になる。だからこれから俺が一人前の四天王になるよう鍛えてやる。性根からみっちりな！」

木場の鍛え方は徹底した実戦主義。

俺の精霊である馬鹿こと李超と、木場の精霊である白狼ことポチをひたすら戦わせる事で、戦いの雰囲気と勘を掴ませようとしているようだ。しかしその方法は俺には合わないらしく、練習が始まってから二ヶ月経った現在でも、俺与李超のコンビは、木場とポチコンビに対して勝機は見えてこなかった。

二ヶ月の訓練もあって手での発勁はもちろん、霊具がカチューシヤなので、頭での発勁も覚えた。それで気をよくして、他にも腹や尻やらありとあらゆる所でスムーズに行えるように訓練し、今では精霊の実体化はだけなら完璧に出来るようになった。

だがそこまで完璧に発勁を使えるようになって、俺の霊気で実体化した李超は「バァァウ」とポチが吠えるだけで、湯気のように雲散した。これで四天王杯において負けが確定する。

精霊を使役して戦う場合、敗北には三通りあると教わった。

？精霊の使役者、つまり四天王が降参するか戦闘不能状態に陥る。

？精霊の実体化が消える。

？霊具が使役者の体から離れる。

？は一般的な勝敗の決め方だが、？と？は精霊同士での決闘独特のルールである。

？の場合は、精霊の実体化が使役者の霊気を媒介にしている為、使役者の霊気切れが、すなわち実体化が解けることに繋がるから負けになる。

？の場合は、使役者の体から霊具が離れると、発勁をしても霊気が精霊に届かなくなるので、必然的に実体化も解け、結果、敗北となる。

と偉そうに語ってみたものの、俺の場合はいささか事情が異なる。

俺は発勁ならばなんなくこなせるのだが、それを一定に維持することが苦手で、ポチの雄叫びだけで解けてしまうほど実体化が不安定なのだ。霊力切れや霊具どうこうではなく「まったくお話になりませんぞ旦那」な状態なのだ。その事に一番腹を立てているのは木場である。

「一体いつになったらまともに発勁ができるようになるんだよ！もう本番まで一ヶ月切ってるんだぞ！」

今は七月の中旬。四天王杯の第一回戦の日は八月の第一日曜日。

木場の言うとおり、一ヶ月を切っていた。

「お言葉ですが木場さん。俺は発勁自体は出来るんですよ。ほら現に今の発勁は腹でやっているんですから」

そう言つてTシャツをめくると、横腹におもちゃの角が上手い具合に噛み合っている。

「そんな所で発勁出来たって何の意味もないだろうが！ 発勁は手でできれば充分なんだよ！」

「それは分かってますよ」

そこまで言わなくてもいいのに、と不満げな顔を浮かべて答える。木場はますます激昂した。

「全然分かっていないんだよお前は！ 四天王杯がどれだけすごい行事なのかという事も、全てを投げ打つてでも俺が勝ちたいという気持ちも！」

「そんな事言つてもしょうがないじゃないですか。俺は俺なりに頑張つて発勁の維持の練習はしているんですよ。いつも一緒に鍛錬しているんだから、木場さんだって知っていますよね」

そう切り返すと木場は何も言えなくなった。単位を取り終えた木場と違って一回生の自分は、平日は朝から夕方まできっちり講義があり、その合間を縫って練習する事がどれほど大変な事なのか、木場は経験しているからだろう。

しかも練習初日から今の今まで、毎日この練習場に来ては、何時間も四天王杯にむけた鍛錬を行っているのも木場は知っている。正直嫌でやっている部分はあるが、ここで手を抜くほど俺は子どもではない。

「……悪い角井。言い過ぎた」

「こちらこそすいません。迷惑かけてばかりで」

急に重くなった空気の中、上手にお座りをしていたポチと、今にも消えそうな李超は、口をぽかんと開けながら黙っていた。動物なのだが、その表情からはどうしたらいいの？ 的な感情が読み取れる。

「……ちよつと入れ込みすぎたな。今日はもう切り上げて、明日も休みにしよう」

そう言っただけで木場は練習場のドアを開け、汗も拭かずに立ち去った。ポチもすぐにその後について行って、残された俺と李超は、なんとなく重い空気を引きずったまま、互いの顔を見合わせていた。

「……明日休みだつてよ。つっても講義はあるから大学には来ないといけないんだけどさ」

「そうか、まあ我には関係の無い事だが」

そりゃそうだと苦笑しながら、横腹についた角をゆっくりと手に取った。今日はもう相手がいないので、いくら練習したとしても意味がない。

「なんだ小僧、今日の訓練はおしまいかな？　今日はあまり靈氣を使っていないだろうに」

「そうだけどさ、相手がなくちゃ練習にならないだろう？」

「相手がいても練習にならない奴が、何をほざいておる」

そこを突かれるとグウの音も出ないのは事実だ。発勁をより持続的に、安定して使えない限り、精靈を使役して戦う四天王杯では役立たず。いくら練習したとしても出来なければ意味はない。

そう考えると明後日には木場と顔を合わせるという気まずさも相まって、ますます気分が落ちていった。そんな様子を見ていた李超は、明らかに聞こえるように大きな溜息をした。ゆっくりと俺に近づいて来て、前足を器用に浮かし、うな垂れている俺の頭を小突いた。

「――てえ！　何するんだよ！」

「もうやめだ。我慢するのはやめだ」

李超は口を左右に動かして、威嚇するかのように口を開いた。

「一応小僧が我を使役する立場であつたから、今まではおとなしく従っておったが、もうお主には任せてはいられない。本日より指揮権は我に譲ってもらおうか」

そう語る李超の目からは、強い意思が汲み取れた。今まで大人しくしていたのが嘘であったかのように自信に満ち溢れている。

「いや、今の俺が言える立場じゃないんだけど、鹿の指示に従って
も」

「たわけ！ 鹿ではなく馬だと何回も言っておろう！ いや、元々は馬でもなかったがな」

鹿が馬だという時点で混乱するというのは、さらに李超は馬でもないと言い出した。何が言いたいのかさっぱり分からない。

「我は他の精霊とは異なり、自然物より生まれた根っからの精霊ではない。死んで幽体となった際、御神木に寄生した死霊型の精霊なのだ。よく分からぬと思うが、我は今のうちに馬の形をして精霊になる前は、小僧と同じように人間だったのだ」

話を聞けば聞くほど頭が混乱していった。鹿が馬を名乗り、しかしてその実体は元人間だったのだと言う。だが、それがどうしたのだというのが本音だ。

「どうしてそれが精霊に指揮を譲る理由になるんだ？ 李超が人間だったとしても関係ないだろう？」

そう問いかけると、李超はただでさえ大きな黒目をさらに見開き、ずずいと顔を近寄せてきた。

「まだ人間だった頃——我は軍師をやっていた」

「……軍師？ 軍師ってあの、戦争とかの戦術やら戦略を考えて指揮するあの軍師だよな」

李超は大きくクビを縦に振り、下唇をペロツと舐めた。

「しかも並みの軍師ではない。かつて中国大陆を統一した、あの『秦』の軍師だぞ」

一回戦？

いよいよ四天王杯の一回戦当日を迎えた。

試合は本日の対戦校である広目天大学の陸上グラウンドで行われる。四天王杯では昨年度の勝利チームが戦場を決めるという伝統があり、昨年の四天王杯の準優勝校である広目天大学に我々持国点は敗北を喫したため、広目天大学四天王同好会は普段練習をしているホームグラウンドを選んだというわけだ。完全なるアウェーゲーム。

蛇足だが、我が持国天大学は、四天王杯において広目天大学には三年連続敗北という不名誉な戦績を残してしまった。つまり木場が在籍してから一度も勝っていないことになり、木場が怒りをむき出しにしたのも当然といえば当然だった。

「俺とポチの仕上がりもいいし、聞く限り蛇蔵と千鳥も大分息が合ってきたようだ。ポテンシャルで見れば、持国天の方が勝っている。臆せずに正々堂々と相手をねじ伏せるぞ」

広目天大学のグラウンドの隅にある陸上部室を改装した楽屋で、木場は発破をかけ、全員の士気を高めようと心がけた。だが木場は俺の名前だけは言わなかった。

もちろん一ヶ月前の気まずさはとっくに払拭し、あれから毎日練習に付き合ってくれていたもので、それが理由ではない。では何故俺の名前だけ呼ばなかったかというと、今俺が着ている服装にその原因がある。

「いや角井。お前が発勁の維持がとても苦手だという事を、俺はよく知っている。でもだからといってそれはないだろ？ それに残り

一ヶ月の訓練で、なんとか戦いになるレベルにまでにはなったし」

「でも苦手なのは変わらないですし、この戦いが自分にとって初陣です。いつ集中力が切れて、発勁が出来なくなるのか、分からないですから」

「それはそうだけど。その初陣に、わざわざ白装束を着てこなくてもいいだろうが」

木場の言う通り、俺は須弥山で精霊を授かる際に着ていた、釈さんの霊気をたっぷり込めて編んだ白装束を着ている。強制的に霊気を体外に出すという性質は、裏を返せば常に発勁を行っているという事になる。そこに目をつけた李超が「一回戦はこれを必ず着ていけ」と指示したので、俺はそれに素直に従っただけである。

だがこの白装束は、発勁のやり方を教わっていない新四天王が、精霊を呼び出す時の補助として使われるだけに限定され、それ以外に使用されることは無く、ましてや四天王杯に着てくるという例は一度としてなかった、と木場は言う。

「いいか角井？ その白装束を着て戦いに挑むというのは、対戦相手やご観覧になる神々に『自分は発勁も出来ない腑抜けでございませう』とアピールしているようなものなんだぞ！ もの凄く恥ずべき事なんだ！」

「体裁ばかり気にして負けてしまうよりも、恥をかいても勝つ方がいいと思うんです」

「恥をかいた上負けたらどうするんだ！ 負けたら持国天大学四天王同好会の、いや、四天王の永きに渡る歴史に泥を塗る事になるん

だぞ！」

「――大丈夫。負けません」

この言葉に嘘はない。約三ヶ月に及ぶ猛練習にも耐えたし、李超が考えた奥の手もある。木場とポチコンビには一度も土をつけた事がなかったが、それは木場が俺より三年も早く四天王をやっているからで、今日対決するのは自分と同じ一回生だ。少なくとも勝負にはなるだろう。

「角井君もこう言ってる事ですし、ここは彼と精霊に任せましょうよ。俺と千鳥ちゃんは、木場さんと角井君がどんな練習をしてきたかは分からないですが、ここまで投げ出さずに頑張ってきたんですから」

蛇蔵が横からナイスサポートを入れても、木場の怒りはまだ収まらなかった。

「それは他の大学も同じなんだよ。特に広目天は六年連続の準優勝だ。今年こそはと意気込んでいるだけに、モチベーションならどこの大学にも負けていない。格下の俺らにだって、絶対に手を抜かないぞ」

「もし負けたら、私の鴉達の餌にすればいい」

こんな恐ろしい事を、臆せずに本気で言えるのは千鳥だけである。今日も今日とて違う鳥マスクをかぶり、首から下はカーキ色のツナギを着ている。赤い鶏冠が天に向かってピーンと立っているのも、まず間違いなく鶏だろう。でもこの前のように鳥談義が始まったら

敵わないので、無視。

「そりゃいいな。よし角井！　もし負けたら千鳥の鳥の餌になってもらうからな」

急にご機嫌になった木場は俺の肩をバンバンとはたたいた。しかし、その害は木場にまで及んでいない。

「木場も例外ではない。私は確実に一勝する。もし木場と角井のどちらにも負けて、一回戦を落とした場合。貴様等二人とも餌にする」

「……分かりました」

しゅんとなった木場は俺の方に顔を向ける。お互いの瞳には、恐怖という名の火が灯っていた。

芝生で敷き詰められたグラウンドは、今からサッカーの国際試合でもするかのように手入れが行き届いていた。その芝が真夏の太陽に晒され、「さすがにこれは無理。熱すぎるもの」と熱吸収を放棄し、その上に立つ二組の四天王を苦しめていた。

だが俺達は広目天の四天王よりも辛い状況にある。グラウンドを囲むように広目天大学の学生が観戦しているのだ。その圧迫感と言ったら言葉にならない。

ここで一つ疑問が浮かんだので、隣にいた千鳥に小さく声をかけた。

「あの千鳥さん。一つだけ質問いいですか？」

「なんだ？」

「一般人って精霊見えませんよね？　なのに何故、観客がいるんですか？」

「それが見えるんだ。お前と同じだ」

「同じ？」

「お前が白装束を着て発勁を維持しているように、観客も白装束ほどではないが、それと同効果の手ぬぐいを持っている」

観客の方を見やると、全員の腕や頭に白い布を付けられていた。俺が白装束を着て精霊が見えたように、観客もそのおかげで精霊が見えるようになるのか。

視線を前に戻そうとすると、視界に笑顔で手を振る釈さんの姿が飛び込んできた。両隣にはスーツを着た年配の男性が座っており、一人は持国天の学長である。

「千鳥さん……その手ぬぐいを編んだのは、もしかして釈さんですか？」

「そうだ。物に霊気を込めるなど、あの人にしかできない芸当だ」

……何者ですか釈さん。

千鳥が無駄話をしていると、木場が「静かにしろ」と言ってきたので、すぐさま視線を前に戻し口をつぐんだ。木場が正面に立つ女性に「すいません」と頭を下げると、その女性はゴホンと咳払いをし

た。広目天大学の四回生、確か名前を大崎だったような気がする。

「被害を最小限に抑える為、四百メートルコースの内側までが戦場になります。よろしいですか？」

木場にそう伝えたと、横から千鳥が、「空もその範囲なのか？」と聞き返す。

「ええ、できればそれをお願いします。空だと出たか出てないかの判断基準が難しいので、多少の誤差は見逃しますが」

「安心しろ。ルールならばしっかり従う。その上で完膚なきまでに叩き潰す」

千鳥の余計な挑発に、広目天大学四天王同好会の面々はピクツツと身体を震わせた。特に千鳥の真正面に立つ男は、眉間に皺を寄せて千鳥を睨んでいた。

「今年こそ絶対に負けない」

「……」

完全無視を決め込む千鳥に、男は今にも飛び掛ろうと右足を前に出したが、

「そんな安い挑発に乗らないでくださいよ。今殴ったりしたら、それで僕達の負けなんですから」

俺の目の前にいる小柄な男がそれを制した。

「先輩の勝手な行動で、僕の白星を黒く塗りつぶすつもりですか？
勝負はこれからなんですから、今は冷静になりましょうよ」

「そうだったな。悪かったよ……土田」

いえいえ、と土田と呼ばれた男は首を振った。その最中チラッと俺の顔を見て、口を上げた。明らかに顔を見て笑う。

『僕の白星を黒く塗りつぶすつもりですか？』

これはまた、安い挑発なこと。

俺は見ても見ぬ振りをしてポリポリと頭をかいた。落ち着いたところで大崎が口を開いた。

「ゴホン……とりあえず、正々堂々、四天王杯の名を汚さぬように戦いましょう。では、これより四天王杯開幕戦。持国天大学四天王同好会と、広目天大学四天王同好会の試合を始めます！」

先鋒は当然、一番未熟な一回生が行う。つまり俺と安い挑発男である土田との対決だ。一応これが初陣である為、本来ならば審判を一人つけるだけでいいのだが、主審に木場、副審に広目天大学の二、三回生をつけて、計三名で行う。グラウンドの中央に木場、その脇に副審。そして十メートルほど距離を置いて、俺と土田が面と向かっている。

いよいよ、始まる――。

「では両者、霊具を装着し、精霊を召喚せよ」

木場の合図に、俺は白装束の帯に付けていたおもちゃの角を手に取り頭につけ、弛んだ帯を先ほどよりもぎゅっと強く結んだ。腹に締め付けられる感覚が走ると、発勁を行わずして李超が真横に現れた。

とはいっても発勁を行っていないので温泉からあがる湯気のように李超の姿は希薄だった。

角に手を添え発勁をした。ここでやっと奈良ではよく見かける雄鹿の姿がくつきりと浮かぶ。少し気合を入れすぎたのか、いつもより李超の角が大きい気がする。

「……絶好調かの小僧？」

「どうだろう？ 初めての本番だし、しかも外だからなんとも言えないな」

そうか、と李超は声をもらすと、対戦相手の土田を見た。それに続いて見ると、土田は大きな黒い手袋を右手にはめていた。ディズニールランドにあるミッキーの手袋を黒く塗ったような安い作りだ。霊具からでは、こういった精霊を操るのか分らなかったの、土田が発勁をするまでよく観察したのだが、一向に精霊は現れなかった。

「よし、お互い精霊を召喚したな。ではただ今より四天王杯一回戦。持国天大学四天王同好会対広目天大学四天王同好会の先鋒戦を開始す——」

「ちょっとタイム！ 相手は精霊を出していませんよ！」

木場が開始の合図をする前に、なんとか間に入ってそれを止めた。しかし木場はそれを見殺しにしている。

「試合開始っ！」と号令を掛けた。

「えっ！ ちょっと待って！ 相手はまだ精霊がっ！」

狼狽する俺を土田は笑って見ていた。

「何を言ってるんだい？ 僕の精霊はちゃんとここにいないか」

ちよんちよんと真横を指差す木場は、さもそこに精霊がいるような素振りをする。どう目を凝らしても、そこには何もいない。

「李超……精霊が見えるか？」

「見えないな……だが、気配を感じる。あの男が言うように精霊の召喚は行われているだろう」

俺自身は全く気配を感じないのだから、精霊である李超が言うのだから間違いない。だからこそ木場も試合を始めたのだろう。だけでも、見えない。

「はっはっはっ！ やっぱ君には見えないか。でもそれも仕方ない事さ。なにせ、僕の精霊は——カメレオンだ！ 故に僕は『擬

態の王』と呼ばれている！」

土田は勝ち誇ったように高笑いをした。

カメレオン？ 擬態の王？

つまり今、土田の精霊は擬態をしていて、俺の目には映らなくなっているのだ。

なんと卑怯な！ 見えない敵にどう戦えと言うんだ！

「落ち着け小僧。冷静なって考えろ」

李超は焦る俺とは対照的に、至って平然とした態度だった。

「落ち着け？ 冷静になれ？ この状況でどうしてそんな悠長に構えられる？ 敵の精霊の姿が見えない以上、こちらからは攻撃できない。でも相手は見えない事を利用して、いくらでも隙をついてくれるんだ。どうやっても勝てないじゃないか！」

「ど阿呆が！ 相手の精霊が見えようが見えなからうが、その程度で勝敗が左右するわけがなからう！」

今までに聞いた事もない李超の大声に、心臓を鷲？みされたかのように動けなくなった。確かに李超の言うとおり、俺は冷静さを欠いていた。炎天下という悪条件にくわえ、予想だにしない相手の能力に、考えるという選択を奪われていた。

「いいか小僧。この四天王杯はどうやって勝敗を決めるのかを思い出せ。精霊を倒す事だけではなかったろう」

李超の言うとおり、精霊同士の戦いは、精霊の強さや能力で勝ち負けを判断するわけではない。精霊の実体化が解けるか解けないかで判断されるのだ。

相手の精霊が見えようが見えなかりうが、霊具さえ剥がしてしまえば、精霊は消える。

「その顔をみると、どうやら勘付いたようだな。精霊など無視して、直接使役者を襲えばいいのだ。それにカメレオンと馬では、筋力も機動力も、遥かに我の方が上だ」

李超の言うとおり。カメレオンと馬では根本的な力が違う。正確には鹿だが、カメレオンと鹿でもそれは同様だ。勝てる。これは勝てるぞ。見えなくとも勝機はあるのだ。それに気が付くと、自然と鼻息が荒くなり、ドクドクと血流が速くなるのを感じた。

「だから落ち着けと言っとうろが。相手も我々がその手で来るのは想定済みじゃ。おそらく何らかの対策はとっておろう。だが、奴の狙いも我々と同じように霊具の奪取にあると見て、間違いはないだろうな。既にあやつの精霊が、小僧の後ろに回っている可能性もあるぞ」

思わずはっとして頭につけた角を両手で押さえ、後ろを振り返る。もちろん何も見えない。

「その緊張感を忘れるな。常に小僧の霊具を狙っていると考えていろ」

「はい……気をつけます」

「よし……ならば耳を貸せ、相手の攻撃を防ぎ、同時に霊具を奪える、一石二鳥のいい手がある」

李超がそう言うので、腰を少しだけ折り、李超の口元に耳を近づけた。その姿勢だと、ちょうどいい具合に土田の姿が見える。何を企んでいるのかは分からないが、その間土田は一步も動こうとはせず、ただ黙ってこちらを見ていた。

試合開始の合図があつたのにも関わらず、俺も土田も全く動いていなかった。遠くから観客が「さっさと戦え!」「何やってんだコラ!」と野次を飛ばしてくる。そんなの知るか! と俺は李超の作戦を聞いていた。

その作戦は確かに一石二鳥ではあるが、そこまで素晴らしいものでもなかった。むしろこっちとしては、本当にいいの? と李超に聞き返したいほどのものだった。

「勝利の為には多少の恥は仕方がない。小僧も恥を捨てて、その白装束に身を包んでいるのだろう」

そう本人? 本馬? 本鹿? が言うのだから、俺は黙ってそれに従うしかないが、実を言うところの作戦、奈良県民として生を受けたのなら、一回はやってみたかった事なのだ。

「さあ早くしろ。一気に終わらせるぞ」

「了解」と俺が声を出すと、李超はその場にゆっくりと伏せた。そ

の上を俺がまたがり、背の少し窪んだ部分に腰を下ろすと、李超は「よいしょ」と踏ん張り、生まれたての仔鹿のように四本足をプルプル震わせながら立ち上がった。

すると今まで野次を飛ばしていた観客達は一斉に拍手をし始めた。

「鹿に乗ってるぞ。アイツ！」

「鹿ライダーだ！ 鹿ライダーがいるぞ」と、大爆笑し始めた。

目の前にいる土田も余裕綽々と言った様子で、鹿の背に乗る鹿の角をつけた男の姿を笑って見ていた。まさかここまでのリアクションが起ころとは予想しておらず、顔が真赤になった。これは恥ずかしい。だが李超は、恥ずかしがるといよりは憤慨しているように鼻を鳴らし、ぎゃあぎゃああと騒ぐ観客に向かって、

「我は鹿ではなく馬だ！ 馬の背に人が乗って、何がおかしいのだ！」

なんて叫ぶものだから、さらに状況は悪化。

「馬鹿だ！ 馬鹿ライダーがいるぞ！」

俺は鹿ライダーから馬鹿ライダーへ、奇跡の進化を遂げてしまった。

「もう帰りたい」

「……同感だ。実に気分が悪い。さっさと擬態の王を名乗るあの男

を打ちのめすぞ」

こくりと頷いて、土田の方を一斉に睨みつけた。李超の立派な角を手綱代わりにして、頭を起こすように引っ張ると、俺を背に乗せた李超は勢いよく駆け出した。

いくら人間を乗せているからと言っても、鹿の本来の脚力ならば、十メートルなど距離がないに等しい。一瞬にして陸上グラウンドは静まり、聞こえるのは風を切る音と、芝を踏みつける馬蹄、でなく馬鹿蹄の音だけだった。

俺は振り落とされないようにしっかりと角を掴んでいた。それでも目だけは閉じず前をしっかり見つめていた。

十、九、八、七……確実に距離は詰まっていく。完全に虚を突くことに成功し、土田は反応する事すら出来なかった。

六、五、四、三……やっと土田はこちらに気付き目を大きく見開いた。だがもう既に遅い。この距離では、どんなに優れたスポーツマンでも、反応できない。

二……土田は大きく見開いた目をゆっくりと細め、口元を緩めた。こんな危機的状況でもかかわらず、笑っていたのだ。

何かを仕掛けている！

そう気付いた時には、もう自分の力では止められない程の加速がついており、そのまま突撃するしかなかった。

一、そして零……。

李超と、その背にまたがっていた俺は――奈落の底に落ちていった。

一回戦？

この身に何が起こったのか、全くもって理解できなかった。

手を伸ばせば土田に触れられる距離まで詰めていたのに、何かが崩れる音とともに、目に映る世界が黒く変化し、土田はいなくなつた。加えてジェットコースターに乗った時の、もわっと内臓を締め付けるような無重力が全身を通り抜けた。

なんじゃこら、と思っている間に、李超の背を通して重い衝撃が伝わり、その衝撃で体が跳ね上がり、ゴロンと転げ落ちた。

それでもまだ終わらず、上から土やら小石やらがボロボロと零れ落ち、口内に無遠慮に入り込んだ。ペツと唾を吐き、光の照らす方へ目をやると、太陽がやけに遠く感じられる。日光は容赦なく襲い掛かり、それを遮るため右手を顔に当てようと思ったのだが、何かに挟まっているかのように、ビクとも動かない。顔を向けると、右腕が肘の辺りまで土に埋まっていた。

この時、俺は土田が笑った理由はこれなのだとを理解した。

『落とし穴』に嵌ったのだ。

しかもその落とし穴は、幼稚園児がお遊びで作れるような代物ではなく、深さは五メートルほどあり、幅は二メートルはあろうかという大きさだ。太陽が遠く感じられたのも無理はない。

すぐに現状を理解しようと埋まった右腕を引っこ抜いて、湿った

土壁を支えに立ち上がった。最初に映った光景は、土や芝生にまみれて、苦しそうにうずくまっている雄鹿の姿だった。

「李超！ 大丈夫か！」

すぐさま駆け寄って土や芝を払い、李超の横顔を軽くはたいた。

「……問題ない」

平静を装ってはいるものの、李超の声は苦痛に歪んでいた。時折チラチラと後ろ足の方を気にする素振りをしていた。不審に思ってから足の方を見ると、関節のない部位から、不自然に折れ曲がっていた。

「問題ないわけないだろ！ 足が折れてるじゃないか！」

「私が精霊で、既に実体を持たない死霊だという事を忘れるな。いくら怪我をしようと、骨が折れようと、実体化さえ解ければ、すぐに治る」

「本当か！ じゃあ今すぐにでも霊具を……」

「——ど阿呆！ 我的姿が消えていないのなら、まだ戦いは終わっていないという事だ！ 自ら霊具を外し、実体化を解く奴がどこにおる！」

李超の声は、悲鳴にも近いほど甲高い。

五メートルもの落とし穴から落ちた上に、その背には人間が一人

錘になっていたのだから、鹿の細い足でそれを全部支えるなんて不可能。俺が特に目立った怪我をしていない事から、李超は落とし穴に落ちる衝撃のほとんどを受け止めたていいる何よりの証拠だった。

李超が精霊なのは分かっているし、死んでいるのも聞いた。だが実体化している限りは痛みを感じるのだ。

「……もういいよ、李超。俺達の負けだ」

「何がいいものか！ このままやられっぱなしで悔しくないのか！」

歪む李超の横顔を撫でながら、呟いた。悔しくない、と言えば嘘になるけど、それ以上に俺は、苦しむ李超の顔を見ている方が辛かった。これでも奈良県民の端くれ、鹿が傷つく姿を見るのは忍びない。

「悔しくないわけじゃないけど、四天王杯はまだ始まったばかりなんだ。今回負けても、俺には残り二試合ある。そこで挽回すればいいじゃないか」

言い終わると、俺はゆっくり霊具の方に両手を持っていった。これを外せば俺は負けるが、李超は苦しみから解放される。これでいいんだ……。

「ふざけるなあああ小僧！」

李超はこれまでに聞いた事がないほどの声を上げ、身体は動かさず、首だけを思い切り伸ばして、左腕に噛み付いてきた。甘噛みなんてものじゃなく、腕が噛み千切られる圧力が腕にかかった。

反射的に、余った右腕で李超の顔を思い切り殴ってしまうと、李超は顎を緩め、鋭い眼光で睨みつけてきた。

「私の苦しむ顔を見るのが辛い？ 残り二試合ある？ 何寝ぼけた事を言っておるのだ！ 負ける理由を私のせいにするな！ 未来の自分にするな！ それでも男か！」

仄暗い落とし穴の中で、李超の声が激しく響く。四方八方から耳に入ってくる声は、怒りの感情が込められていた。そこまで言われると、俺だって逆上したくなる。

「お前の為を思ってたんだろが！ 何故それが分からない！」

「何が『お前の為』だ！ そんな偽善を敗北の理由にするな！ 本当に私の事を思うなら、ここから勝つ方法でも、無い脳みそを絞って考えたらどうだ！」

「そんな事、考えるだけ無駄なんだよ！ こんな深い穴の中で、立ち上がることもままならない精霊と、小心者の人間がどうやって戦えるんだよ！」

「お前には、霊具がしっかり身についている。霊気だって充分にある。我も立ち上がることは出来ないが、首から上なら問題なく動かせる。冷静に考えれば、戦力的には十分の一も消費してはおらんのだ。この状況で、どうして敗北と言う選択肢を選ぶのだ！」

「……でも、こんな所に落ちてしまったら、俺と李超の力では這い出る事もできない……」

わずかに指す日光が李超の顔に当たると、「まったくもって情け

無い」と大きく溜息をついている李超の表情が見えた。こんな顔をされたら、どう返していいのか分からない。

「小僧……お前は見ただろう。試合開始前、鳥女に噛み付く男の姿を」

李超は口調をガラツと変えて、諭すように切り出した。引き合いに出したのは、千鳥に無視されて今にも飛び掛りそうになった広目天の二回生の男だった。なぜ李超がそれを知っているのか一瞬分からなかったが、前に「実体化してなくとも、声を聞くだけなら充分にできる」という事を、蛇蔵から教えてもらった事を思い出した。

「……見たけど。それがどうしたって言うんだ」

「お前はあの姿を見て、惨めだと思わなかったか？」

あの時の事を思い返すと、少しだけ惨めだった気がするが、ぼんやりとしてはつきりしない。逆にはつきり浮かんでくるのは、土田の自信満々のニヤケ顔だった。

「よく思い出せないけど、そんな気もする」

「そうだろう。奴は鳥女に負けたが故、飛び掛りたくなるほど惨めな思いを一年間してきたのだ。それもそのはずだ。鳥の被り物をした生意気な女に負けるなんて、それ以上の恥はないだろう」

たしかに、たしかに。

「では、小僧の場合はどうだ。ここで負けたらお前も、あの男と同じように一年も惨めな思いをしなければならない。やたら背が低く

て、嫌味な笑顔ばかり浮かべるあの男にそんな感情を抱いて過ごしていけるのか。……はつきり言おう。私は御免だ。あんな男のニヤケ顔を一年も思い返さなければならぬなんて、考えたくもない！
今、我が足に走る痛みには耐えられても、そればかりは耐えられん！ 負けたくない！ お前だってその気持ちは分かるだろうが！」

早口に言葉を紡ぐ李超は、今まで見たこともない激情に震えていた。全身がブルブルと震え、全てを伝えようと必死だった。

「前にも言ったが、我は生前、秦の軍師であった。負ければ即、死に繋がるという状況で、常に采配をふるってきたのだ。なかには、絶望的とも言える事態に陥った事がある。落とし穴に落ちた程度ではなく、それこそ喉元に矛を突きつけられた事すらあるのだ。それでも我は屈しなかった。決して諦めず、最後まで勝利にこだわった。だからこそ我は乱世を乗り越え頂点に立ったのだ。いいか小僧。負けたら次はないのだ。戦争を知らないその辺の人間どもは、『負けて初めて知る事がある』などと世迷言を言うが、そんなものは嘘だ。負けて得るものなど無い。全てを失うのだ。動物も人間も精霊も関係なく、戦に勝利し、奪い取ってこそ得るものがある。それがこの世の定理なのだ！」

一気にまくし立てる李超に、思わず後ずさり、生唾を飲み込んだ。まさか鹿に、この世の定理を諭されるとは思っていなかった。啞然として言葉も出ない。

「はあはあ……この阿呆め。お前があまりに情けないばかりに、痛みを忘れてベラベラと喋ってしまったではないか」

「……すいません」

「小僧には、言って聞かせるよりも、体感した方が早いだろうな。上を見てみる」

李超に言われるがまま見上げると、出口に人影が映った。土田が覗いている。俺を見おろしていた――いや、見くだしていた。

「あれー？ 落ちた衝撃で霊具が外れると思ったんだけどな。意外としぶといね！」

土田は、こちらの様子など気にする素振りもせず、ケラケラと笑っていた。陰になって表情は読み取れないが、間違いなく笑っているのだろう。あの腹の立つニヤケ顔をしているのだろう。

「どうだ……あの男に負けたくないだろう」と李超がそう語りかける。

「まあそうだけど。でもこの状況を打破できるとは」

どうも一歩が踏み出せない。穴に落ちるように、小心者から臆病者に成り下がっていたのかもしれない。きつと冷静さを欠いているからだ。頭を冷やせればきっと。

よく見えない土田の顔を睨みながら、そんな事を考えていると、ビチャリと額に冷たい液体が落ちてきた。

「ごめん、ごめん。口開けっ放しで覗いていたから、涎が垂れちゃったよ。もしかしてかかっちゃった？」

額を拭うと、手の甲にネバネバした液体がこびり付いていた。涎なんて生易しいものじゃなく、痰がからんでいた。

ああそうか、そういう事するんだな、あのチビは。

「……首から上はバッチリ動くんだよな」

急に声のトーンが低くなった俺の声に、李超は驚いたものの、自信たっぷりに答えた。

「当然だ。何の問題もない」

「じゃあ叩き潰してやろうか。こっちはまだ奥の手があるんだ」

李超は鼻息を荒げ答えると、首を天に向けて土田を睨みつけた。

その隙に俺は、手で拭った痰をこっそり李超に擦り付けた。そこは連帯責任という事で。

李超が動けない以上、この狭く湿った穴の中からは出られない。それはつまり土田の霊具を奪うという方法では勝利を得る事はできず、土田の使役するカメレオンの精霊を、霊気が尽きるまでポッコポコにしなければならなかったということだ。

視界の悪い穴の中では、カメレオンの擬態という能力が必ずしも有利ではなくなったが、それでも何かしらの策は講じているのだろう。状況は圧倒的に土田に利がある。

だが、まだ負けていない。

「そうだ！　一つだけ言わなくちゃならない事があったんだ。実は僕、君達に嘘をついていた。本当の僕の精霊はカメレオンなんかじゃないんだ！　擬態の王って言うのも真赤な嘘なんだよ！」

思わぬカミングアウトに、目を大きく開いて見上げると、穴を覗き込みながら、目を細めて笑っている土田がいた。

「何を言ってるんだお前は？　じゃあ本当の精霊は何だよ！」

「そんなの教えるわけないだろ！　君は馬鹿か？」

その通り馬鹿です、馬鹿の王です。と言うのも癪なので、口を開く代わりに睨みつけた。

「でも、教えてあげない事もないかな。条件はあるけどね」

「条件？」

「君が今すぐ降参してくれたらね。そうしたら僕の精霊の正体を教えてあげるし、サービスで穴から出してあげるよ」

「却下」

間髪をいれず拒否すると、土田は「あっそ」と呟いた。

「じゃあもう、ずっと穴の中にいれば？　これから君の霊具を奪うけど、その後も助けないからね」

「分かった、分かった。じゃあさっさと奪いに来い……チビ」

機嫌よさげに笑みを浮かべていた土田だったが、チビの一言で急に冷たい表情に変わった。土田のNGワード発覚。

「くたばれ……馬鹿野郎」

「黙れ……チビ野郎」

俺と土田では、だいぶ距離があるというのに、土田のギリッと歯を食いしぼる音が聞こえた。案外怒りの沸点が低い奴だと分かると、状況は何一つ好転していないが、余裕が生まれ自然と笑みがこぼれる。

どっからでも仕掛けて来い。

「行け、もぐたん！ あの馬鹿の頭に着いた角を奪い取れ！」

土田の号令と共に、後頭部にある土壁から、突き破るような音と粘土質の土があふれ出た。ハッとして、頭につけた鹿の角を取られぬように手で抑えようとしたが、コンマ一秒間に合わず、突如として現れた黒い影に奪われた。

その影は器用に角を掴み、倒れている李超の背に着地した。ちょうど日光が差し込んでおり、黒い影の姿がゆっくり現れる。ずんぐりとした小さい体に、尖った鼻。暗いせいか目がどこにあるかわからない、いや無いように見える。加えて、小さいながらも鋭い爪を持つ四肢には、土が挟まっていた。この一見愛らしいようで不気味な容姿を、幼い頃見たことがある。

こいつは——モグラだ。

その時、全ての謎の点と点が繋がった。

どうして姿が見えなかったのか？

どうしてこんな大きな落とし穴が陸上グラウンドにあるのか？

答えは至ってシンプル。このモグラが掘っていたからだ。

「ははは！ 紹介するよ。これが僕の本当の精霊、モグラの『もぐたん』だ！ そして僕は、擬態の王ではなく、『土竜の王』と呼ばれている！」

見上げると土田が高笑いしていた。これもまた腹の立つ表情だ。しかして、木場といい蛇蔵といい、この土田といい、四天王になる奴はどうしてこうネーミングセンスが乏しいのか、はなはだ疑問である。もし李超に名前が無かったとしても、俺はこう、ビシッと痺れる名前を付ける自信がある。

「なに間抜け面で見上げている？ お前の霊具はもうもぐたんが奪ったんだ。この勝負、俺の勝ちは決定したんだよ！」

「確かにおもちゃの角は奪われたな。でも、まだ負けてないんだけど」

「何を馬鹿な事を言っている？ 霊具を取られたら精霊が消えるんだぞ。実体化が途絶えたら、その時点で負けだ。そんな事も分からないのかお前は」

「いや、分かっているよ。だからこそ、勝敗はまだ着いてないって言っているんだ」

そう言って俺は人差し指を立て、真横を指差した。そこには何食わぬ顔をして実体化する李超と、その背に乗るもぐたんがいた。

「ちゃんと見えるだろ？ 俺の精霊の姿が」

その時の土田の顔は、精霊の姿が見えないと狼狽した時の俺よりも、落とし穴に落ちて混乱した時のおれよりも、大袈裟に歪んでいた。李超の策が、土田の知略を上回ったのだ。

だが、驚くのはまだ早い。

「――李超！ そのモグラを捕まえろ！」

「言われなくとも！」

思考停止した土田は、一瞬の判断が出来ずにいた。霊具を奪い、そこで試合は終わると考えていたのだから仕方ないのかもしれないが、李超ならば「最後の最後まで気を抜くな」と叱責するだろう。

土田の精霊は今、俺と李超に挟まれ、袋の鼠だ。

「――しまった。もぐたん逃げろ！」

「遅い。もう準備は整っている！」

李超は百八十度首を動かし、立派な角でもぐたんを挟み込んだ。

李超が鼻を鳴らすと、その角はぐにやりと曲がり、もぐたんを絞めつけるように形を変えた。胴体に絡みつき、枝分かれた角は、四肢の付け根に綺麗に巻きつく。

もぐたんはもがいて、振りほどこうとするが、もがけばもがくほど、その胴長の丸っこい身体に食い込んでいく。様子を見ていた土田が「もぐたん！ もぐたん！」と声を荒げて、それはもう後の祭りだった。

グイグイ食い込む角に、もぐたんはぐったりと全身の力を抜いた。

「もぐたんは諦めたみたいだけど、お前はどうするんだ！ 負けを認めない限り、お前の霊気が尽きるまでもぐたんを締め付け続けるぞ！ それとも、もぐたんを助ける為にここまで来るか？ 自分の意思で、五メートルの大穴に飛び込む勇気があるなら来いよ！」

そう叫ぶと、土田はひたすら引っこ抜いた芝生を投げつけてきた。

「卑怯だぞ！ 霊具を取ったのになんで実体化しているんだよ」

「卑怯なもんか。奥の手と言えこの野郎！ あと、草とか土とか投げてくださいなチビ！」

「うるさい！ 僕に口答えするな！ お前なんか死んじゃえ！」

だんだん投げつけてくる芝や土の量が大きくなってきて、顔を上げられなくなったが、最後に大きな塊を投げつけてくると、投擲攻撃は収まった。

最後に投げたもの、それは土田が手にはめていた黒い手袋だった。李超の角に締め付けられていたもぐたんが、湯気のようにふわっと

霧消した。

「それまで！ 勝者、持国天大学先鋒——角井大和！」

試合終了を告げる木場の声が響いた。

終了の合図が聞こえると、すぐさま木場が落とし穴を覗いてきた。

「すぐにそこから出してやるから、ちょっと待っている」と声をかけてきた。

お願いしますと一言告げると、本当に終わったんだと言う安堵感から腰が抜けてしまった。

「どうだ小僧。私の策が完璧にはまっただろう」

初陣を飾れた事で痛みを忘れて喜んでいる李超は、何度も瞬きしながら、下顎を左右にスライドさせていた。どうやら満足しているらしい。

「ああ、さすがは名軍師様だ。勝っちゃったよ」

「当然だ。我は常勝の軍師だぞ」

束の間の勝利に酔っていると、穴の中に図太い大蛇が垂れ下がってきた。

「角井君！ いちごちゃんに掴まってくれ。そこから引っ張り出すから」

爽やかな蛇蔵の声が聞こえ、大蛇の方を見ると、「シャアア」と舌をちらつかせた。毒蛇だったような……。

「噛まないように言っというたから大丈夫だよ。早く掴まって」と急かした。

「早く行け、霊具を外すのは後でいいから」と李超が言うので、土田が投げた黒い手袋のような霊具を抱えながら、いちごちゃんにしがみ付いた。

引っ張り出されると、全方向から日光に襲われ、眩しさのあまり、ぎゅっと目を瞑った。芝生に足が着くのを感じ、しがみ付いた腕をいちごちゃんから離し、ゆっくりと目を開けた。

正面には目を腫らせた土田の姿があった。霊具を投げ返すと、土田は両腕でしっかりと受け取りこちらを睨んだ。

「……どうして霊具が直接肌から離れたのに、精霊は消えなかったんだ？ ちゃんと説明しないと納得がいかないぞ」

先ほどまでは暗い穴の中から見ていたので、正確には表情を読み取れなかったのだが、土田が流した涙の跡が見えた。

「簡単な事さ。俺の頭についていた鹿の角は、霊具じゃないんだ」

そう言って白装束の懷に手を入れ、『本当の霊具』を取り出した。

「あれはダミー。これが本当の霊具だよ」

この『ダミー霊具作戦』は一回戦直前の三日前、李超が突然提案した事だった。

「せっかく腹で発勁が出来るのだから、それを上手く利用するぞ。お前の霊具はそもそも頭につける形で簡単に外れやすいし、奪われやすい。奪われたら負けという四天王杯では、あまりに不利だ」

この一言から俺は、白装束の帯をぎゅっと締めると肌に触れるよう細工し、さらにダミー用の鹿の角を作った。幸い、元々がおもちやのような安い作りだったので、素人が作ったにも関わらず何の違和感もない仕上がりになった。

種明かしをすると、土田は納得したように頷いた。

「そうか……はめたつもりが、こっちがはめられていたとはな」

「まあ落とし穴には、思いつきはまっちゃったけどな。あれには驚いたよ」

憑き物が落ちたように急におとなしくなった土田は、大学生には到底見えないほど幼く、弱々しく見えた。

「四天王杯は始まったばかりだし、二、三、四回生と戦える機会はまだまだある。一回生同士、これから頑張ろう」

そう激励し、俺はスポーツマンシップに則するという形で、土田の前に手を差し出した。顔を上げた土田はニッコリと笑みを浮かべ、

俺の手首を掴んだ。

何かおかしいぞと思っていると、土田は素早く自分の口元に俺の手を引き寄せ、「カァー」と喉の奥で痰を絡ませ、「ペッ!」と吐き出した。

「いきなりいい奴になるんじゃないよ馬鹿! 次勝つのは僕だ!」
と吐き捨て、駆け足で逃げていった。

来年の四天王杯は、もっと苦しめてやろうと、心の奥で誓った。

中堅戦は、観客の誰もが驚きを隠せなかった。広目天大学の二回生、三回生コンビを、千鳥はたった一人で蹴散らしたのだ。

空を埋め尽くす鴉の大群が、広目天大学の二人が操る精霊の徹底したコンビネーションを攪乱させ、完全に動きを止めていた。業を煮やした二回生の男が、精霊を無視して、千鳥に襲い掛かってきたのだが、千鳥は臆する様子も無く伸ばしきった手を掴み、軽くひねってみせると、男の身体は綺麗に宙を舞い背中から地面に落ちた。苦痛に歪む男を尻目に、千鳥は男の霊具を取り上げた。

残る精霊は一柱となった。さすがは三回生だけのことはあって、そこそこ粘ってみせたのだが、攻撃をしては空に逃れるという徹底したヒットアンドアウェー作戦に、徐々に体力と霊力を削りとられ、健闘むなしく力尽きた。

木場と俺のが座るベンチに帰ってくる、無表情の千鳥と笑顔の蛇蔵。どうせ千鳥に声をかけてみても「当然だ」と返されるに決まっているので蛇蔵に話しかけた。

「凄いですね。蛇蔵さんが手を出さなくても勝てるなんて。余裕じゃないですか!」

「いやいや、あれが俺と千鳥ちゃんコンビの最強パターンなんだ。『蛇蔵は弱い。邪魔になるから隅っこの方で静かにしてろ』って千鳥ちゃんに言われてね。だから静観していたのさ」

蛇蔵はいつもと変わらぬ爽やか笑顔だった。それでいいのか蛇蔵よ。

二連勝で持国天大学の勝利は決まったものの、「ここまで来たら全勝しかないだろう!」とさらに気合を入れた木場が大將戦に臨んだ。

蛇蔵が審判をし霊具を付けるように言うと、木場は八重歯が尖っている透明なマウスピースをとりだした。俺を四天王同好会の部室から逃がさないようにした際、チラリと見えた牙で、それが木場の霊具だった。

ゆっくりとその牙をはめると、「ウオオオオオオオ!」と口を大きく開けて雄叫びをあげた。口から勢いよくポチが現われ、俺と李超には見せた事のない、獰猛な獣の表情をしたポチが現れる。あまりの迫力に俺はもちろん、ガヤガヤと騒いでいた観客も黙り込んだ。

——これが本気の木場。

俺との練習では、半分も力を出していなかったのだ。この時には、既に勝敗は決していた。俺と同様、対戦相手の中田も木場とポチの圧倒的な威圧感に縮み上がり、発勁すらままならなかった。

なんとか精霊の実体化が成功し、大将戦が始まったのだが、ポチが大きく口を開き、牙を突き刺すように精霊に噛み付くと、あつという間に姿を消し木場が勝利をもぎ取った。

昨年まで三年連続敗北したというのが嘘だったように、四天王杯一回戦は、持国天大学四天王同好会の全勝で幕を閉じた。

広目天大学を出た頃には既に正午を回っていた。俺達持国天の四天王は一度大学に戻り、食堂で昼食がてら、これからに向けてのミーティングを行った。

午前中は持国天大学と広目天大学の一回戦が行われ、午後は毘沙門天大学と増長天大学の初戦が行われる予定になっていた。今まさに、後の対戦校が戦っているが、四天王杯では対戦校への詮索は許されていない。

「四天王なら余計な事を考えず、正々堂々と戦おうじゃないか!」とかつての四天王がそう宣言した事から、伝統として受け継いでいるらしい。なんかいろいろと適当な伝統だが、そういうものなのだ。

「初陣を飾ったお祝いだ。今日は俺がおごってやる」

いつにも増して木場がご機嫌なので、少しくらい調子こいてもいいだろうと、いつもは高くて手を伸ばせないカツカレーの特盛（八百円）を食堂のおばちゃんに注文した。

小さなテーブルを四人で囲み、俺のカツカレー、千鳥のネギトロ丼、蛇蔵のオムライス、木場の天ぷらそばが並んでいる。すぐにでもがつついてやろうと思っていたのだが、残る三人が手を合わせて「いたっだきまつす！」と人目もはばからずに大声を出したので、少し恥ずかしくなった。

のど自慢で中学生辺りが、つたないステップを踏み、音程を外して歌っている姿を見る感覚に近い。

ブー……ブー……ブー……。食事中、木場のケータイ電話が鳴った。釈さんからのメールらしい。内容を確認すると、木場は「やっぱりな」と一言呟き、ケータイを閉じて顔を上げた。

「毘沙門天大学が勝った。しかも全勝だ」

二週間後に対戦を控えた毘沙門天大学四天王同好会は、九年連続で四天王杯を制し、今現在、真の四天王として君臨している。

そのネームバリューに加え、昨年は『史上最強世代』と称し、誰一人として負けず、完全優勝を果たしている。昨年準優勝を果たした広目天大学に勝ったとしても、この毘沙門天大学に勝たなければ、優勝の二文字は見えてこない。

毘沙門天大学ばかり紹介するのも最屑に当たるので、ここで愛しの牛嶋さんの所属する増長天大学四天王同好会も紹介しておこう。増長天大学は毘沙門天とは対極に、九年連続最下位という散々な結

果を残し、最弱の四天王と蔑まれている。

さらに昨年は『史上最弱世代』と呼ばれ、誰一人とて一勝もあげられない不名誉。完全敗北、略して完敗をしている。今年も去年に劣らず、やはり弱いらしい。

「増長天には失礼な話だが、次の毘沙門天に勝てば、間違いなく優勝できる。広目天に全勝したからといって、浮かれずに残り二週間を大切にして欲しい。特に――蛇蔵と千鳥」

木場はギロリと睨み付けた。

「今日はたまたま勝てたからいいものの、毘沙門天相手にあの戦法は通用しない。任せっきりにしていた俺にも非はあるが、次からは二人で協力して戦うんだ」

道理で俺には昼食をおごってくれても、蛇蔵と千鳥にはおごらなかった訳だ。

――木場は明らかに怒っている。だが千鳥もまた、それに反感を持っていた。

「私と蛇蔵はちゃんと話し合い、納得してあのスタイルをとった。結果も残しているし、そこに文句を付けられても困る」

「結果は重要だ。だがあの戦い方は、四天王の伝統と歴史を侮辱している。なまじ強いからといって、調子に乗るなよ」

「調子になどのっていない。コンビプレーよりも各個人がそれぞれ最大限の力を出し切った方が、勝機はあると踏んだのだ。文句を言

うのなら私が負けた時に言え。その時は土下座でも何でもしてやろう」

「人の話を聞いてなかったのか？ あの戦い方は、四天王を侮辱しているといったんだ。四天王精神に反すると言っているんだ。これ以上、時国天大学四天王同好会に泥を塗るな」

場の空気が一気に重くなった。蛇蔵はどうしようかと手をジタバタ動かしながら話を変えようとしたが、それに意味は無かった。俺はただじっとしているだけで何も出来なかった。せつかくのカツカレーが冷めてしまう。

「お前は勝ちたいのだろう木場？ ならばこの方が確実だと身をもって知っているはずだ。一回生の時、他の追隨を寄せ付けず全勝したお前が、蛇蔵と組んだ去年、あっけなく全敗した事を忘れたのか？」

木場は勢いよく立ち上がり、今にも怒鳴り声をあげようとした――が、蛇蔵が木場の腕を掴んでそれを止めた。

「千鳥ちゃんとは、もう一度話し合いますから。木場さんは次の試合に集中してください……。お願いします……」

蛇蔵の顔は、普段のナイススマイルとは程遠く、寂しそうな、そして悔しそうな顔をしていた。その顔を見てしまった木場は、そのまま何もすることなく腰を下ろした。千鳥はそのまま席を立ち、足早に食堂を後にし、それを追うように蛇蔵も出て行った。

残された俺と木場は、何をするわけでもなく、無言で俯いて座った。静寂を破るように木場がボソボソと「悪かったな」と言っ

きたので、「いえ」と簡単に答え、残りのカレーライスを口に放り込んだ。

木場とも別れ、アパートに帰宅すると、すぐにベッドに倒れこんだ。まだ太陽は高い位置にあるのに、異常なほど眠気。こんなだらしないう姿を親に見たら、なんて言うのかなと考えながら、携帯電話を開くと、三十分ほど前に母親から着信があった。ずっとマナーモードにしていたので、気が付かなかったのだ。

電話を入れてみると、ワンコールが終わる前に母親が携帯電話に出た。

『ちょっと大和！ あんた一体何をしたのよ！』

眠気を吹き飛ばすほどの母親のテンションに、思わず身体を起こした。

「なんだよいきなり！ 何の話だよ！」

『何の話ってアンタ。入学金の話に決まってるでしょ！』

「入学金？ もしかして払われてないとか連絡が来たのか？ つーか払ったのは母さんだから、俺は知らないよ」

『馬鹿、違うわよ！ 逆よ逆！』

「逆？」

『入学金が全部戻ってきたのよ！ さっき大学から、しかも学長さんから直々にそういう連絡が来て、慌てて記帳に行ったら、ホントに全額戻ってたのよ！ 何でも、息子さんが優秀な成績を残したので、特待生として優遇するとかしないとか言ってきて！ もう意味が分からない。アンタ一体何したのよ！』

啞然としてケータイから耳を放すと、ふと以前木場が言っていた事を思い返した。

「安心しろよ角井。四天王同好会は他のどのサークルよりも楽しいし、やりがいもある。その上大学の代表として様々な特権が与えられる上、飲み会や旅行といったイベントもちゃんとある」

もう少し絞って。もっともっと絞って。

——大学の代表として様々な特権が与えられる——

もしかして、これが特権？ 優秀な成績って、四天王杯で勝ったこと？ 確かにあの時、学長は釈さんの隣で観戦していた。直々に連絡して来る動機もあるといえ、ある。

……マジで、本気と書いてマジで。

『ちょっと聞いているの！ 気分が変わって、入学金を返せとか言ってくる前に、全部使っちゃうわよ！ とりあえず、アンタは免許持

ってないんだから、このお金で取っちゃいなさい。いいわね!』

母親の甲高い声が、ボロアパートの一室に広がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8332u/>

四天王同好会へようこそ

2011年10月9日11時51分発行